

第32图 包含層出土遺物6（土坑2周辺）

大型甕144は、口縁部のやや下方に凸帯を1条巡らすだけのシンプルな形態で、口縁端部は面をもって仕上げる。なお当調査区では、この形態の大型甕の出土は少なく、頸部を波状紋で飾る形態のものが多い傾向がみられる。

甕145はほぼ完形に復元された。体部は直線的に開き、口縁部は「く」の字状に短く外反させる。体部外面はタタキの後ハケで仕上げ、内面は当て具痕を丁寧にナデ消す。蒸気孔は残存部から、中央が円形でその周りに台形のを5個配したものに復元された。焼成は還元焰焼成により仕上げられるが、杯や高杯などに比べるとややあまい。

146は軟質系土器の長胴甕である。胴体部の張りが比較的大きい。

以上、土坑2の上面とその周辺部からの出土品を概観したが、そのほとんどの製品は土坑1・2と同様TK216型式を中心とした時期のものである。

第4項 丘陵斜面部の調査（第33～35図、図版7・8・20～22）

I区丘陵の北側斜面の調査である。1988年度にも一部調査を行っているが、今回の調査区は平地部との傾斜変化地点付近にあたる。地層の堆積は厚い場所では約1mを測り、丘陵方向からの斜面堆積の状況が観察された。堆積の時期は、堆積層のかなり下部からも近世の遺物が出土しており、ほとんどは近世以後と推定された。ただ、堆積層の下層については第35図に示したように出土遺物に近世遺物が含まれず、古い段階の堆積層の可能性が示唆された。

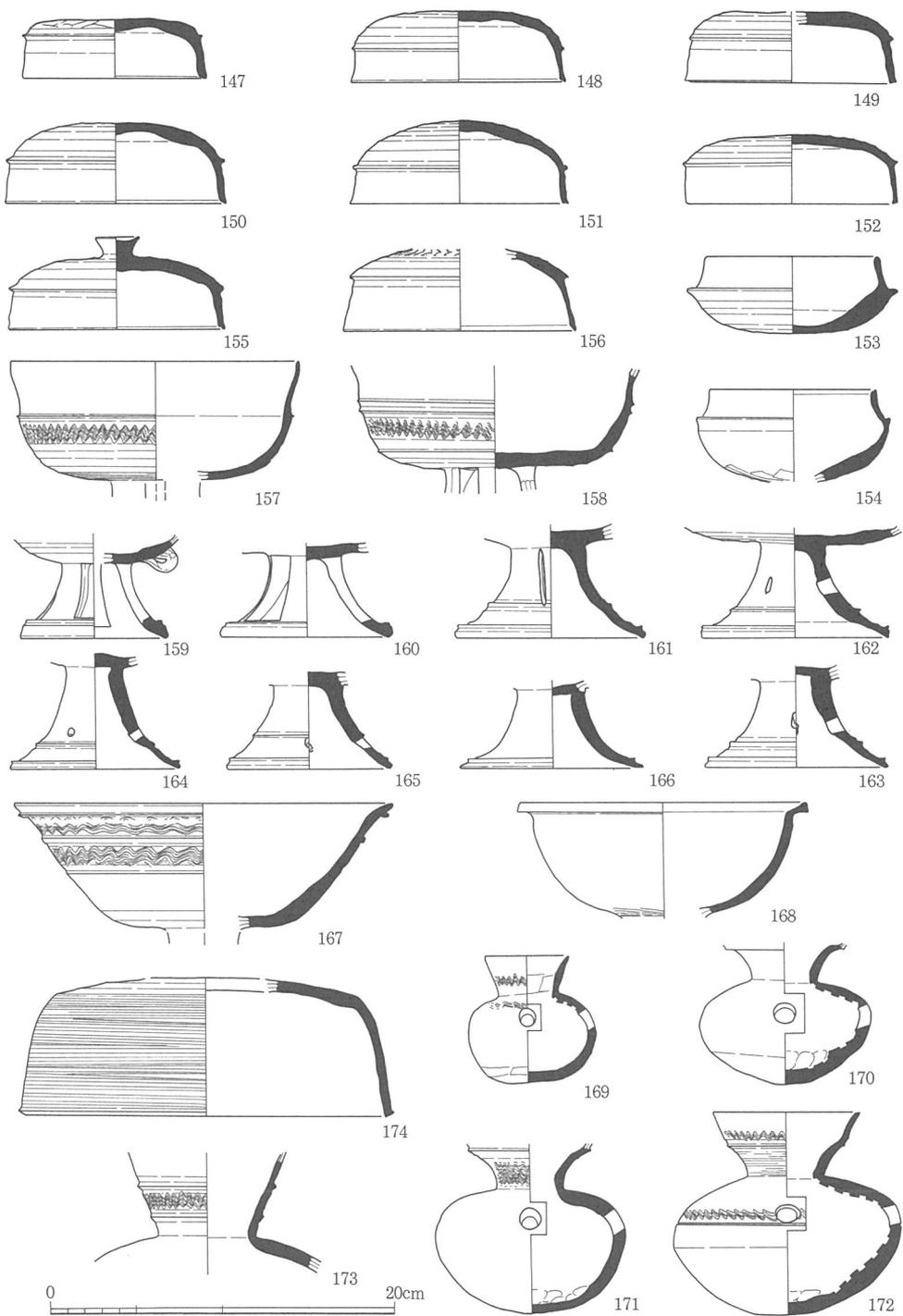
出土遺物は第33～35図に示した。以下、遺物を概観する。

杯蓋は天井部がやや扁平なもの（148～150・152）が多く、他には天井部に丸みを持ち器高の高いもの（151）、天井部が扁平で静止ヘラケズリで仕上げるもの（147）などがある。

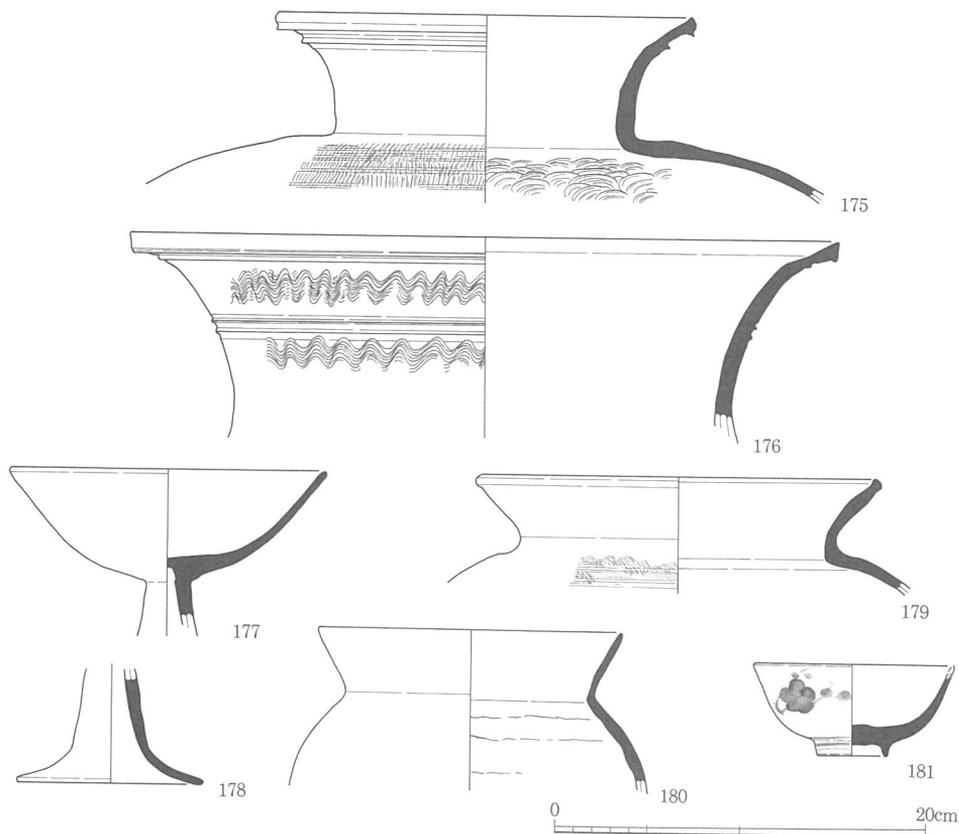
杯身は2点図示したが、このうち154は口径に対し底体部が深い、底部を静止ヘラケズリで仕上げるなど定型化以前の特徴を備えた製品である。

155・156は天井部につまみを付ける高杯の蓋で、156の天井部には刺突紋を巡らせる。

高杯は完形に復元されるものが少なく、杯部片では鉢形のもの（157・158）が図示された。脚部の透かしは長方形で157は4方、158は3方に配する。高杯脚部の透かしには、長方形のもの（159・160）、円形のもの（164・165）、流滴状のもの（162・163）があり、いずれも4方と3方に配するものが混在する。他に脚部では透かしのないもの（166）、切り込み状の透かしを1方向に配するものがあるが、後者の出土数は少ない。167・168も高杯の杯部片と推定されるが、これらの形態の出土数は少ない。



第33图 丘陵斜面部出土遺物 1



第34図 丘陵斜面部出土遺物 2

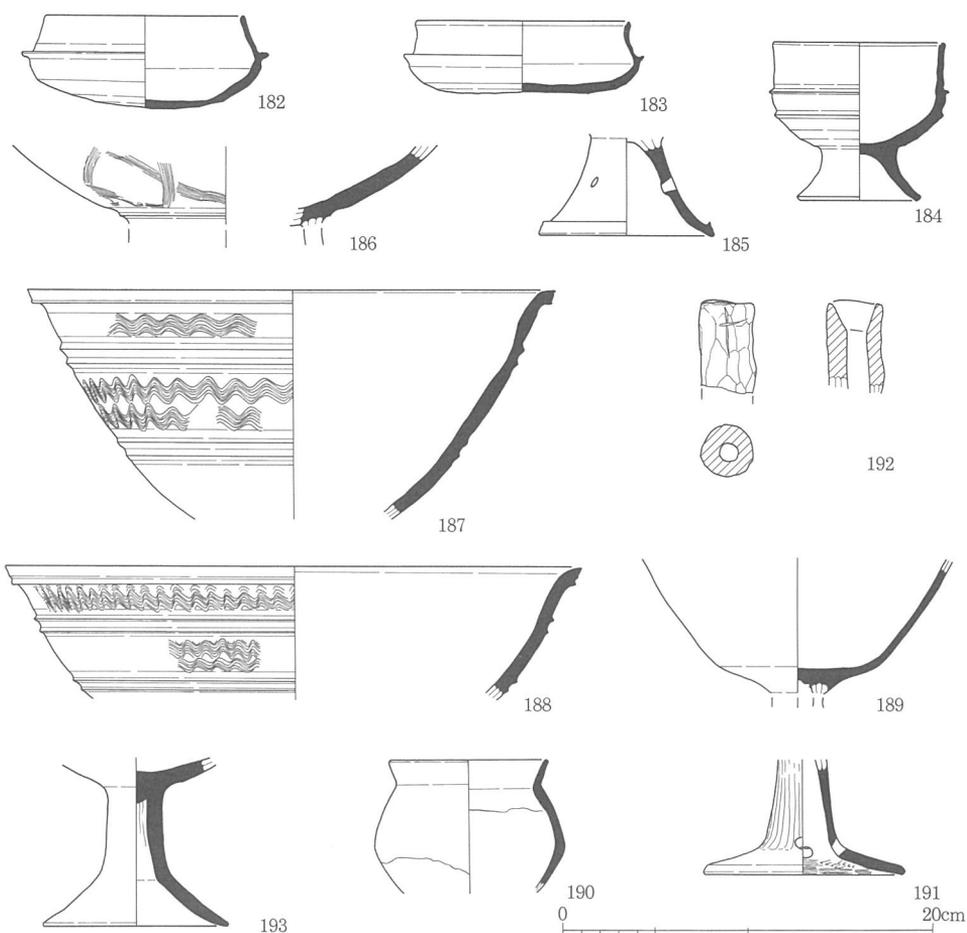
壺は一般的な形のもの（170～172）は、いずれもやや底体部が球形よりやや体部が張る傾向がみられる。169は小型品で、口頸部が直口のもので、出土数は少ない。

173は頸部を波状紋で飾る直口壺。174は大型蓋でつまみの有無は不明である。

大型製品は多くが小破片ため、出土数に対し図示されたものは少ない。壺175はシンプルな口頸部のもので、体部内面には当て具痕が残存する。大型甕176は、頸部を波状紋で飾るもので、口縁端部は平らな面をもっておさめる。

土師器は高杯（177・178）と甕（179）が図示された。高杯177はやや平らな底部から口縁部が直線的にのびる杯部のものである。調整は表面が剝離しているため観察できなかった。甕179は口縁端部をやや肥厚させるもので、体部外面はハケ調整で仕上げる。甕180は179に比べ口縁部がやや直立し、大きさはやや小型である。

181は近世の染め付け碗で、丘陵堆積層の時期を反映させた遺物である。



第35図 丘陵斜面部出土遺物 3

第35図には堆積層下層の代表的な遺物である須恵器（182～188）と土師器（189～191）などを図示した。

杯身183は底部が扁平であるが、これは焼き歪みによるものである。高杯184は小型製品で出土数の少ない形態のものである。鉢形器台は3点図示したが、187・188は口縁端部、文様帯を区画する凸帯などほぼ共通した特徴が観察される。なお、187の口径はもう少し大きくなる可能性が高い。

土師器は残存状況の良好なものが少なく、高杯（189・191）と小型甕（190）が図示された。高杯189は平らな底部から口縁部が直線的にのびる杯部のものである。

192は円柱状の須恵質製品で、用途については不明である。

193は弥生土器の高杯脚部片である。

第5項 谷部の調査（第36～39図，付図1，図版7・22）

谷部の概要と地層の堆積状況

伏尾遺跡は伏尾丘陵と呼ばれる段丘の先端部に位置し、遺跡内には大小いくつもの開析谷が入り組み複雑な地形を呈している。今回調査した谷部もこのうちのひとつで、遺跡の北端に位置する。

北に向かって徐々に広くなり、遺跡の北側に広がる陶器川の氾濫源へと続く。規模は小規模で最大幅約29m、丘陵との比高差は約7mである。

当谷は1989年にそのほとんどの部分の調査を終えている。前回の調査では谷中央部付近の堆積状況が把握され、古墳時代の堆積層からは初期須恵器をはじめとした多くの遺物が出土している。

今回の調査地は谷部の開口部付近がその対象となった。豊富な遺物の出土が予想され、谷部の開口部に近いことから谷の縁辺部では集落に関係した遺構の存在も期待された。

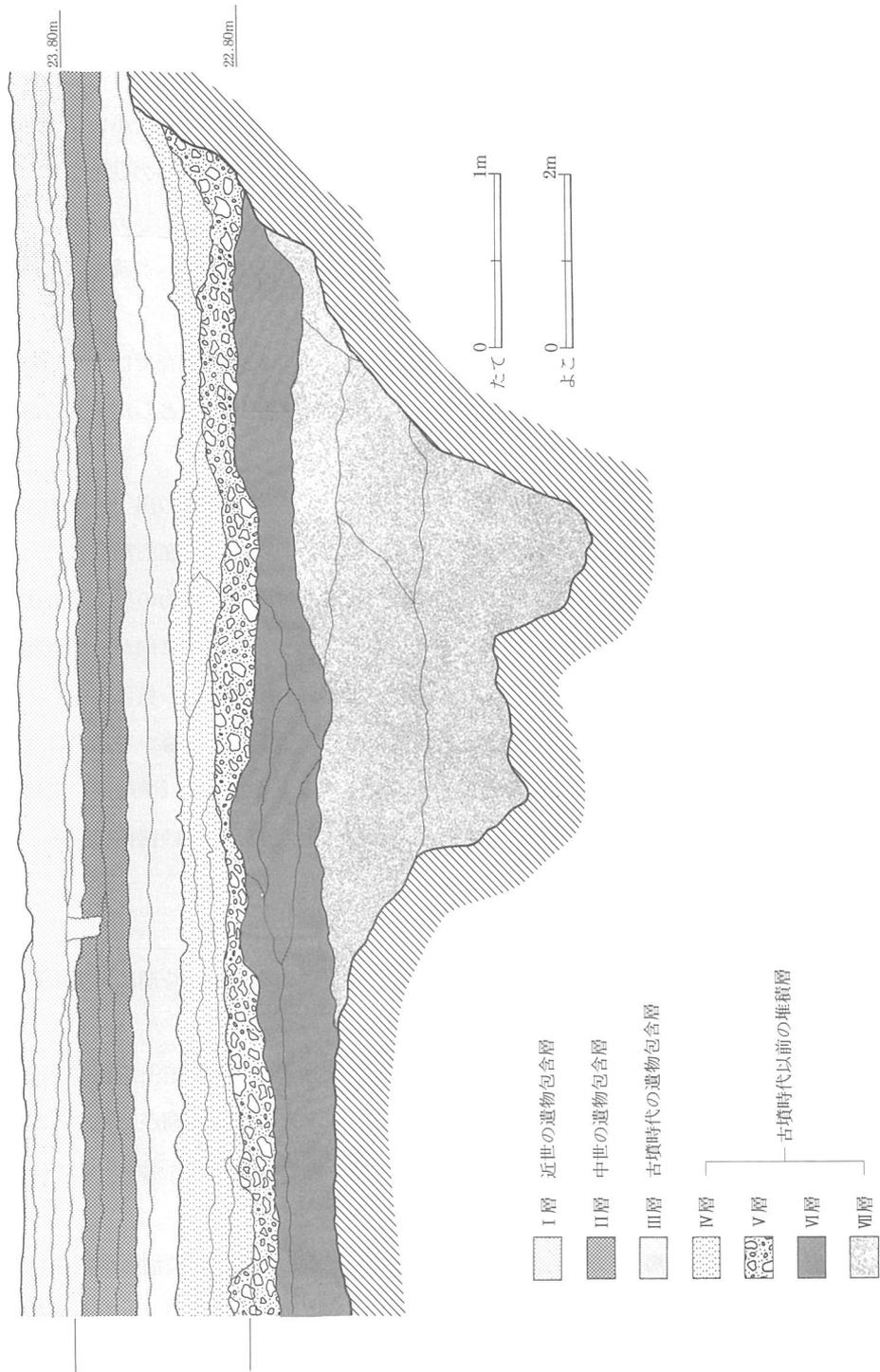
しかし、予想に反し、谷中央部に比べ古墳時代の堆積層は薄く、遺物の出土量も比較にならないほど少ないものであった。前回の調査でも中央部から開口部に向かって遺物量が減少する傾向が看取され、丘陵から谷部への遺物の投棄が谷中央部から奥部を中心に行われたことが推定されていたが、今回の調査成果によりこの推定がより確かなものになったと言えよう。谷縁辺部の遺構については、谷部の西側に広がる平坦部（平地部）で建物群の存在が明らかとなったが、谷部では地形を利用した井戸など、集落に密接に関係した遺構は検出されなかった。

堆積状況については第36図に示した。

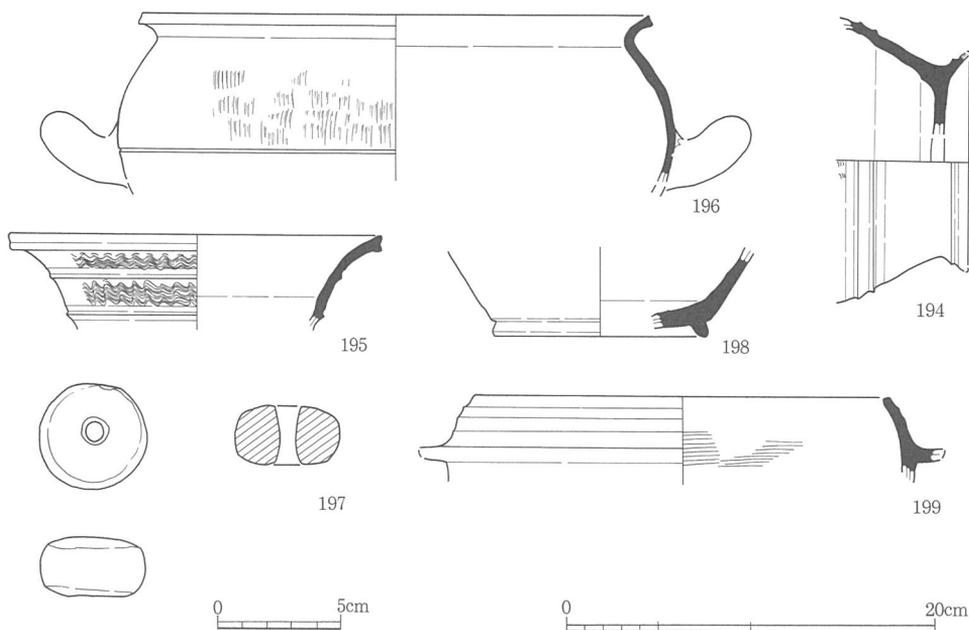
第Ⅰ層 褐色系の粘質シルト層で、耕作土壌層と推定される。所属時期は出土遺物から近世と考えられる。

第Ⅱ層 灰褐色系の粘質土層で、中世の耕作土壌層と推定される。出土遺物は第37図に図示した。初期須恵器（194～197）も出土しているが、当層の堆積時期が反映された遺物としては中世後期の瓦質羽釜（199）を図示した。その他の特筆すべき遺物としては須恵質の紡錘車（197）がある。

第Ⅲ層 黒色の粘土層で、出土遺物から古墳時代中期から後期の堆積層と推定される。当層は谷中央部でその存在が確認されている。谷中央部での層厚は約0.7mであったが、当調査区での層厚は約0.3mとなり、谷中央部から開口部に向かって徐々に薄くなることが明らかとなった。代表的な出土遺物は第38・39に図示したが、前述した通り谷中央部に



第36図 谷部地層断面図



第37図 谷部出土遺物1 (第II層)

比べるとその出土量は極端に少ない。遺物については後で概観する。

第IV層 灰黄色の砂混じり粘土層で、部分的には植物遺体が含まれる地層も存在する。遺物は出土していない。

第V層 褐灰色の細砂混じりの粗砂層である。遺物は出土していない。

第VI層 黒褐色系の粘質土で、各層とも植物遺体が多量に含まれる。遺物は出土していない。

第VII層 灰色系の粗砂層である。遺物は出土していない。

第IV～VII層は各層とも自然堆積層である。堆積時期については、遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。しかし、第III層に古墳時代の遺物を包含することから古墳時代以前に遡ることは確実である。さらに、丘陵上に展開する弥生時代集落との関係を示す土器も出土していない。これらのことから、第IV～VII層の堆積時期は縄紋時代まで遡る可能性が高いと推定される。

また、谷中央部では第III層に対応する古墳時代～弥生時代の遺物を包含する地層の直下が段丘の基盤層であり、第IV～VII層と同一層される地層は認められない。今回の調査区が谷開口部付近に位置し、これらの層は谷奥からの堆積の他、現在遺跡の北側を流れる陶器川方向からの堆積も影響しているものと考えられた。

第Ⅲ層の出土遺物（第38・39図，図版22）

須恵器（200～227）

出土した須恵器はそのほとんどが初期須恵器の範疇に含まれるものであったが，若干古墳時代後期まで時期の下るもの（227）もある。

杯蓋は天井部がやや扁平なもの（200・201・203）と丸みをもつもの（202）がある。口縁部はほぼ直立するもの（200・202・203）と外方向に開くもの（203）があるが，端部はいずれも面をなす。

杯身は底底部の浅いもの（207）と深いもの（208）がある。立ち上がり端部は207が面をなし，208は丸く仕上げる。

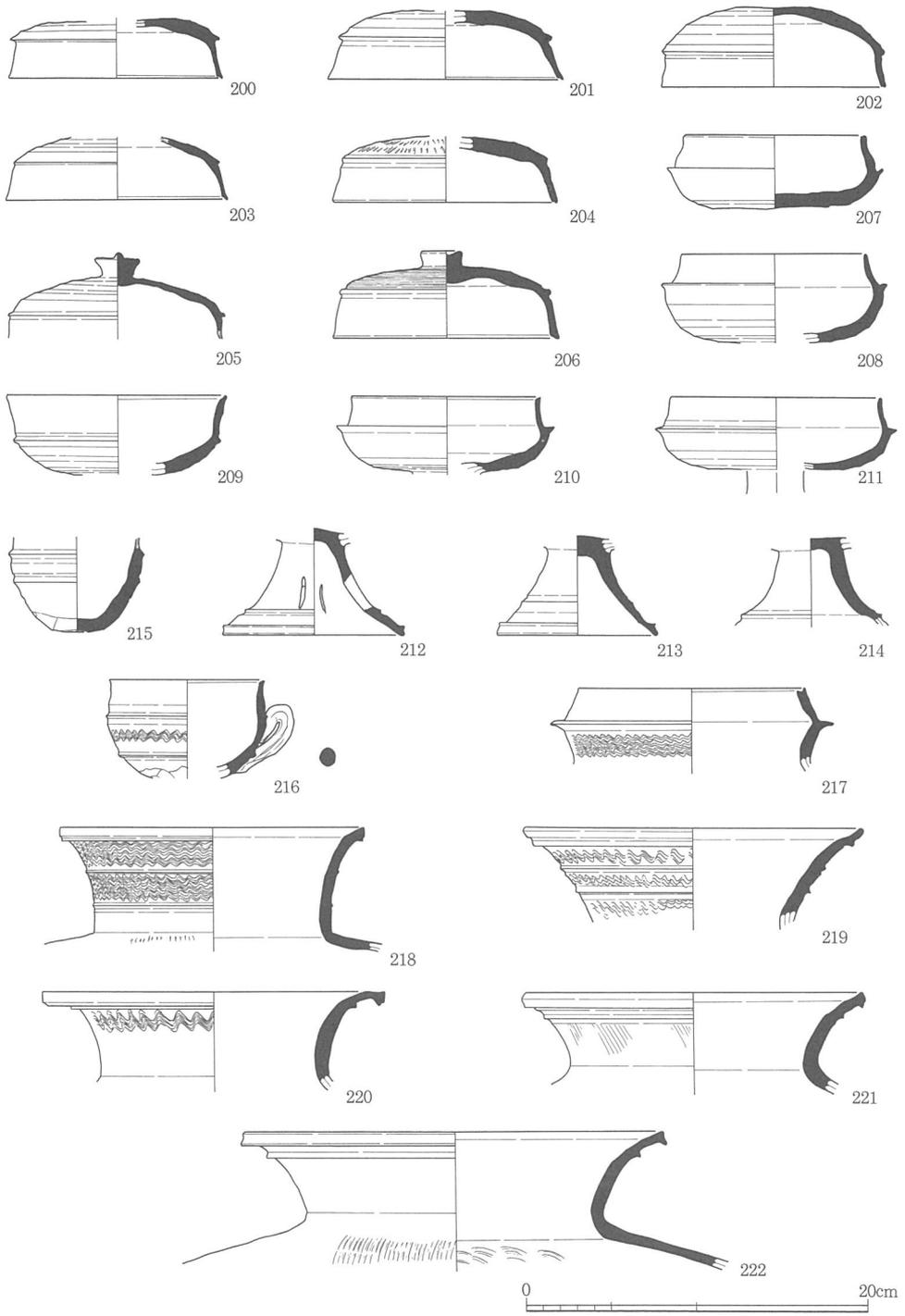
204～206は天井部につまみを付ける高杯の蓋である。204は2列の刺突紋，206はカキ目で天井部を加飾する。つまみはそれぞれ特徴的で，205は頂部が突起状に盛り上がり，206は頂部がくぼむ。

高杯は有蓋（210・211）と無蓋（209）がある。無蓋高杯は鉢形のものも出土しているが，ここでは杯蓋を転用した形態のものが図示された。高杯の脚部は透かしの無いもの（213・214）と切り込み状のもの（212）を配するものを図示したが，他にも長方形や円形透かしのものもある。

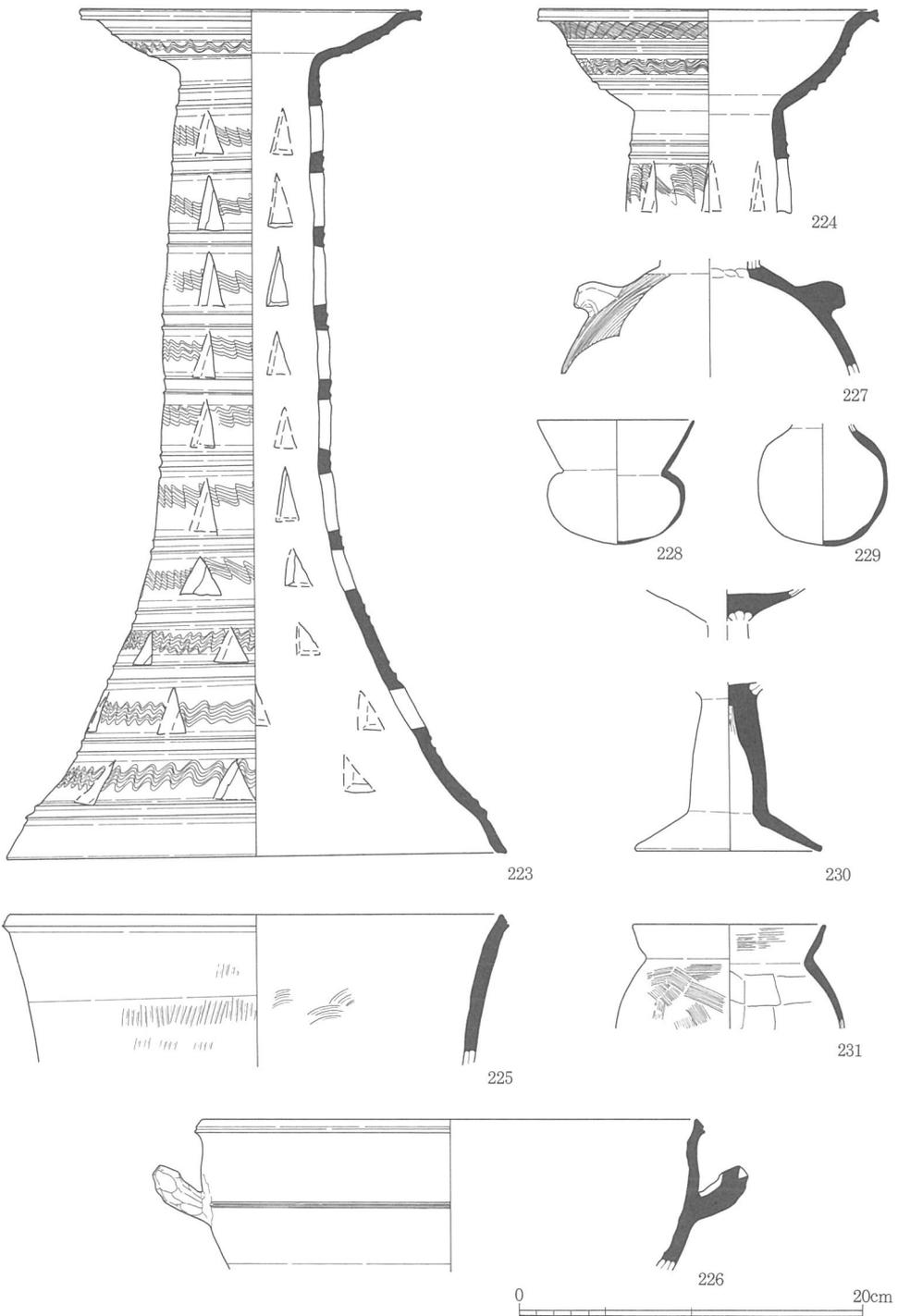
把手付碗は2点図示した。215は小型品で口径に対し器高の高いものである。216は215に比べるとやや扁平で，体部には丸みをもつ。

壺は，口径対し頸部の低いもの（208・220～222）の出土数が多い。口頸部の形状は，直立気味の頸部から口縁部を外反させるもの（218・220）と頸部が胴体部から「く」の字状に大きく開くもの（221・222）があり，前者は波状紋で加飾される。その他壺では，有蓋のもの（217），ラッパ状に開く口頸部を波状紋で加飾するもの（219）なども，数は少ないが出土している。

器台は鉢形のものも出土しているが，ここでは筒形のもの（223・224）が図示された。223は完形品に復元された優品である。受部は浅く，口縁部は水平に短くのびる。筒部は直線的で，裾部は筒部からラッパ状に開き下端部は屈曲して直線的にのびす。筒部から裾部の文様帯は凸帯によって10段に区画され波状紋で飾られる。透かしは三角形のものを上7段には6方向に直列させ，下3段には7方向に千鳥状に配する。224は223に比べると受部の深いものである。筒部から裾部については不明であるが，223と類似した器形のものとして推定される。



第38図 谷部出土遺物 2 (第三層)



第39図 谷部出土遺物3 (第Ⅲ層)

225は甗片である。全体器形は不明であるが、胴部は膨らみがなく口縁部に向かってやや開き気味にのびるものと推定される。胴部内面はナデによって仕上げるが部分的に当て具痕が残存する。

226は鍋である。注口部の有無は不明である。

227は古墳時代後期の提瓶である。小破片であるが、当層の堆積時期の下限を示す資料として図示した。

土師器（228～231）

須恵器に比べるとその出土数は少ない。時期は古墳時代前期から中期までのものが混在し、中期のものは初期須恵器と同時期となると考えられる。

228は古墳時代前期に属する小型丸底壺である。谷部縁辺の平地部では当該期の遺構は検出されていないが、丘陵部では当該期の竪穴住居が数棟検出されている。丘陵部に展開する集落に関連した遺物と推定される。

229は小型壺の底体部である。口縁部形態は不明であるが、228のように大きく開く形態のものが伴うとは考え難い。時期は228より新しく古墳時代中期と考えられる。

230は高杯の脚部片である。柱部は中央付近がわずかに膨らみ、裾部は柱部から短く屈曲させて開く。

231は小型甕である。底体部の外面はハケ調整、内面はケズリによって仕上げる。時期は古墳時代中期と考えられる。

その他、当層では弥生中期から後期の遺物も若干出土しているが、いずれも小片でここでは図示していない。

第V章 古墳群の調査

第1節 調査区の概要（第40図，付図3，図版9）

古墳群の展開する第Ⅲ区は，第Ⅱ・Ⅲ章でも記述したように，調査区のほぼ中央に刻まれた開析谷の南側に位置する丘陵部に設定された調査区で，1989年度に丘陵北半部の調査を終えている。

1989年度調査区の旧地形は，中世以降の耕地開発によりほぼ平坦に改変されていた。しかし，北西に向かって緩やかに傾斜することが看取され，調査区中央付近から北西方向に向けて，弥生時代中期後半の土器が伴う非常に浅い埋没谷が存在することも確認された。遺構も耕地開発によって削平を受けその残存状況は悪いが，弥生時代中期末から後期の竪穴住居や古墳などが残存していた。

今回の調査は，前述の1989年度調査区南端から伏尾遺跡B地区に向かって開口する開析谷によって区切られる丘陵南端部までがその対象地である。前調査区同様，弥生時代中期末から後期の竪穴住居や古墳が検出され，弥生時代集落や古墳群の構造が解明されることが期待されていた。

しかし，今回の調査地は1965年に撮影された航空写真の観察から，そのほとんどが土取りのため削平されているものと予想された。そのため現地調査では，まず重機掘削により削平の範囲を確認することから始めた。その結果，予想通り現地表から約1.5mの深さでそのほとんどが大きく削平されており，遺構面の残存部分は1989年度調査区との調査区境付近のわずかな面積であることが確認された。

このような削平のため旧地形の地形を復元することは困難であった。ただ，開発前の地形図を参考にすれば1998年度調査区南端付近を境にして，南側の開析谷に向かって南西方向にも緩やかに傾斜していることが看取された。また，1989年度や今回の調査区での遺構検出状況から判断して，削平された場所にも弥生時代の集落や古墳が存在していたものと推定された。



第40図 古墳群全体図(1988・1991年度調査区)

第2節 古墳群の概要（第40，付図3，図版9）

1998年の調査では，古墳時代中期に属する方墳3基と円墳1基（方墳の可能性もある）の計4基が確認された。いずれも中世以降の耕地による削平により埋葬施設は残存しておらず，周溝部のみの検出に留まった。

1号墳（41-OG）は一辺約16mの方墳である。周溝内から家形埴輪，朝顔形埴輪，円筒埴輪などの埴輪類や，器台，壺，高杯などの須恵器が墳丘から転落した状況で多量に出土した。

2号墳（689-OG）は1号墳の西側に近接して位置する方墳である。規模は一辺7mで検出された古墳の中では最も小規模なものであり，遺物も円筒埴輪が2個体分出土したのみである。

3号墳は（40-OG）は一辺14mの方墳，4号墳は（39-OG）は直径11mの円墳で，両墳とも削平が著しく，周溝の底面をわずかに検出したのみである。遺物はいずれの古墳も周溝内から須恵器や埴輪が細片となって出土している。

このように1989年度調査区で検出された古墳は，いずれも小規模な方墳や円墳であった。しかし，同じ陶邑の柵地区に位置する野々井遺跡では，小規模古墳の他に，大型方墳や全長20～30mの前方後円墳や帆立貝式古墳など，墳形・規模が卓越した一群の存在が認められる。伏尾遺跡でも，野々井遺跡と同様の古墳群の展開が予想され，今回の調査では古墳群の全体規模の把握とともに1～4号墳より卓越した古墳の検出も期待された。

しかし，実際には前述したように調査区のほとんどは大きく削平され，1号墳とはほぼ同規模と推定される2基の方墳（5・6号墳）を検出したに留まった。

以下，2基の古墳についての詳説する。

5号墳【251-OG】（第40～44図，図版10・11・23）

5号墳は3号墳の南西側に接するようにして位置する方墳で，墳丘・周溝の西端部は削平により消失する。

残存部から復元した周溝肩まで含めた古墳規模は一辺約14m，墳丘規模は一辺約10mと推定される。埋葬施設については平面精査，墳丘の断ち割りによる探索を行ったが，すでに削平を受けており残存していなかった。推定の域をでないが墳丘規模や時期的なことを考慮すれば木棺直葬であった可能性が高い。

周溝幅は南側が約2m、東側が約2.5mで、深さは検出面から0.3～0.4mである。周溝内埋土は大きく2層に分けられる。下層約0.25mは褐色系の粘質土、上層約0.15mが黄色系の粘質土である。上下層間には黒褐色の粘質土が薄く堆積する。この黒褐色層は地層の観察から、その上面が一時期表土化していたと考えられる。さらに、層中からは中世後期の遺物も出土しており、中世後期以前は築造当時から古墳の景観が残存していたものと推定された。

古墳に直接関係した初期須恵器や埴輪などの遺物は周溝内埋土下層から出土した。しかし、これらの遺物はいずれも周溝底面よりは遊離して出土している。さらに、そのほとんどが細片となって出土しており、1号墳でみられたような墳丘から転落したような出土状況とは異なっていた。

以下出土遺物について略述する。

須恵器（第42図・図版23）

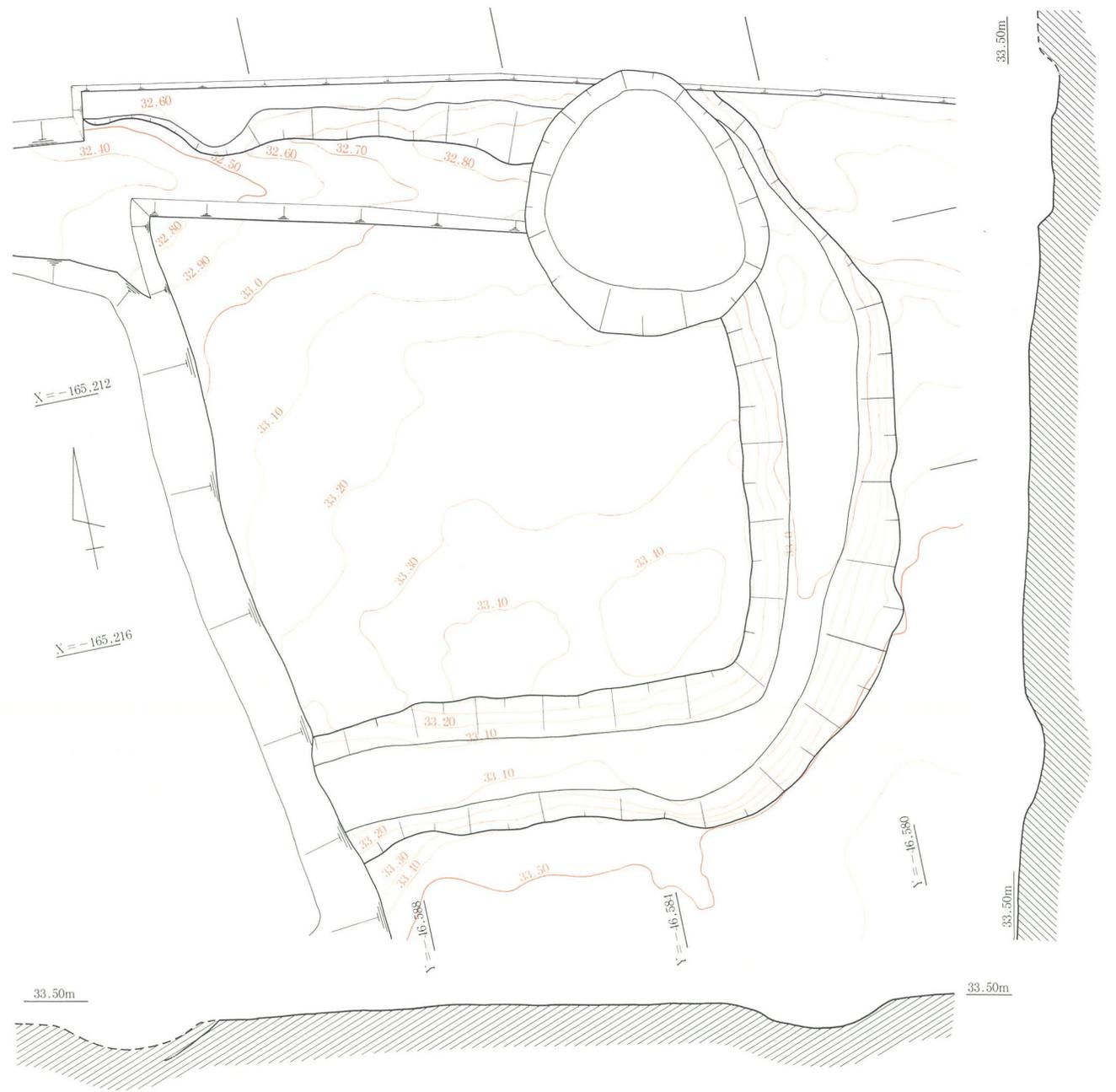
出土須恵器には高杯（235～237）・脚付鉢（238）・大型蓋（239）・有蓋大型鉢（240）がある。

高杯は3点図示された。235の無蓋高杯の杯部は杯蓋を転用した形態のもので、口縁部が長い特徴がある。脚部の全体器形は欠損のため不明であるが、透かしは円形のを4方に柱部の上方に穿つ。脚部236は裾部が柱部からそのまま開いてのびるもので、柱部と裾部境、裾端部には凸線を巡らす。透かしは涙滴形のを2方向に配する。237は裾部が柱部から若干の段をもって開くもので、柱部と裾部の境界、裾端のやや上方に凸線を巡らす。透かしは円形のを柱部と裾部に穿つ。

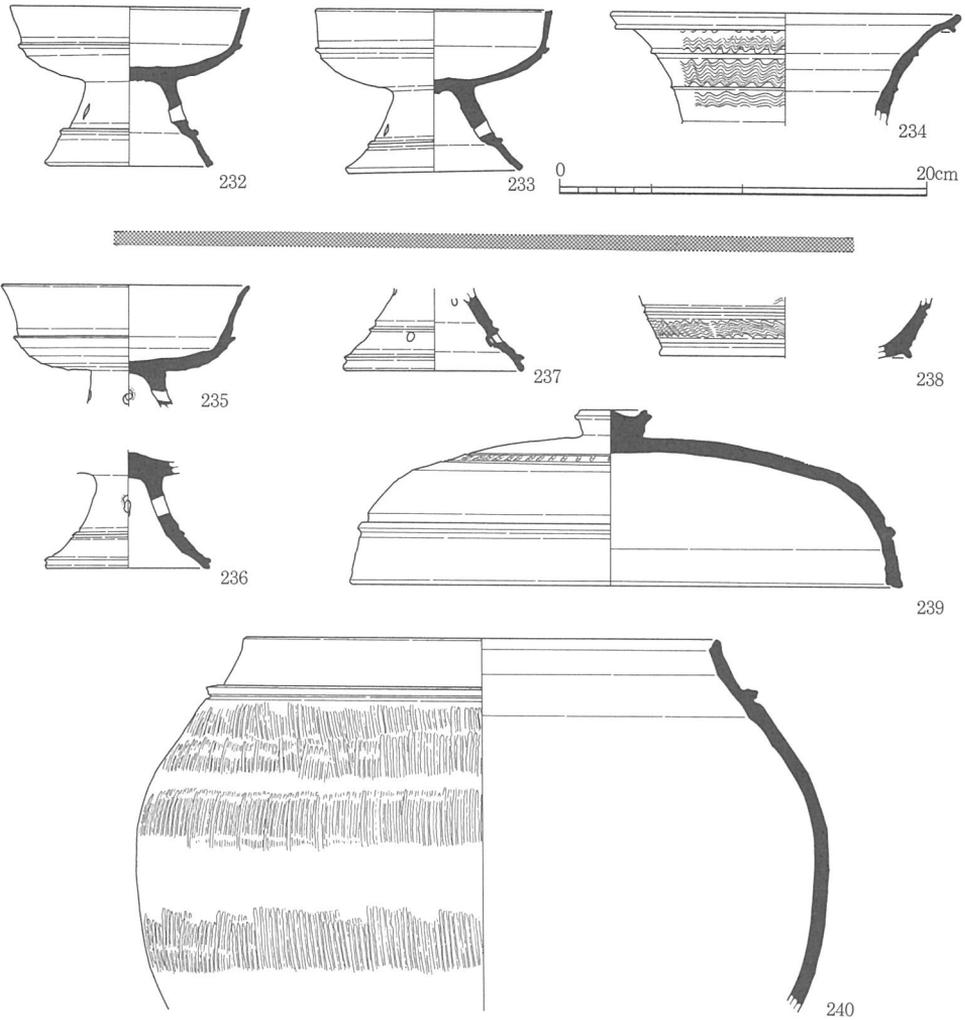
238は小破片のため全体器形は不明である。ここでは脚付鉢としたが、体部が凸帯によって区切られその中に波状紋を巡らせること、底部の形状などからは樽形甕とすべきかもしれない。

大型蓋239は口径29.6cmを測り、有蓋大型鉢240とセットになると考えられる。天井部は沈線と刺突紋で飾られ、断面形はやや扁平である。口縁部と天井部の境界には凸帯を巡らし、口縁端部は面をなしておさめる。仕上げ調整は回転ナデにより全体を丁寧に行うが、内面の天井部付近には部分的に当て具痕が残存する。

有蓋大型鉢240は類例の少ない器形である。体部は球状に張りが大きく、口縁部は体部からそのまま内傾してのびる。受部は断面三角形の凸帯状を呈し、張り出しは小さい。底部は欠損のためその形状については不明である。



第41图 5号墳(251-OG)平・断面図



第42図 5・6号墳 (251・252-O G) 出土須恵器

円筒埴輪 (第43・44図)

円筒埴輪は焼成が土師質 (242~251・253・254) と須恵質 (241・252) のものがあるが、出土量は圧倒的に土師質が多い。

法量はほとんどが破片資料であり、全体を比較することはできないが、口径には約22~24cmものと、これよりやや小型のもの (口径約18~20cm) がある。

外面調整は縦ハケ、横ハケ、縦ハケの後横ハケを施すものがある。さらに横ハケは、器面から離れずに一周するがその間に数回工具の動きを止めるもの (A類)、連続したハケで工具は器面から離れずに一周すると考えられるもの (B類) が混在する。ただ、これら

の外面調整のハケは施す場所によって異なる場合や、破片のため明確に観察できないものも存在する。内面調整はハケを施すものとナデによるものがあるが、ハケを施すものは少ない。また、ナデのみのものには接合痕が明瞭に残存するものもある。

透かしは、2段目に2箇所円形のを穿つものが多い。

241は唯一図上で完形品に復元された。口径17.4cm、高さ32.0cmを測り、当古墳出土品の中では小型品に分類される。焼成は須恵質で、外面調整は1・2段目が縦ハケの後A類の横ハケで、最下段は縦ハケである。また、前述のハケ後最終的に口縁部とタガ部分に粗い横ハケを施す。内面は上半部が不定方向のナデ、下半部が斜め方向のナデである。透かしは円形のを2段目にあける。

242～245は口縁部から2段目にかけての残存品で、焼成はいずれも土師質である。242・243は241よりやや大きい製品と推定される。いずれも1段目の外面調整は縦ハケで口縁部は横ナデによって仕上げる。244・245は法量の大きい一群で、1段目が244はやや開き気味にのび、245は直立する。外面調整は244がA類の横ハケ、245が縦ハケの後B類の横ハケである。

246～248は1段目から2段目にかけての破片と推定されるものである。焼成はいずれも土師質で、2段目の外面調整は246・247が横ハケ、248が縦ハケの後横ハケである。1段目は口縁部付近の調整については不明であるが、タガ付近では246が横ハケA類、248が縦ハケである。

249・250は2段目から最下段にかけての破片と推定されるものである。焼成はいずれも土師質で、最下段の外面調整はいずれも縦ハケである。

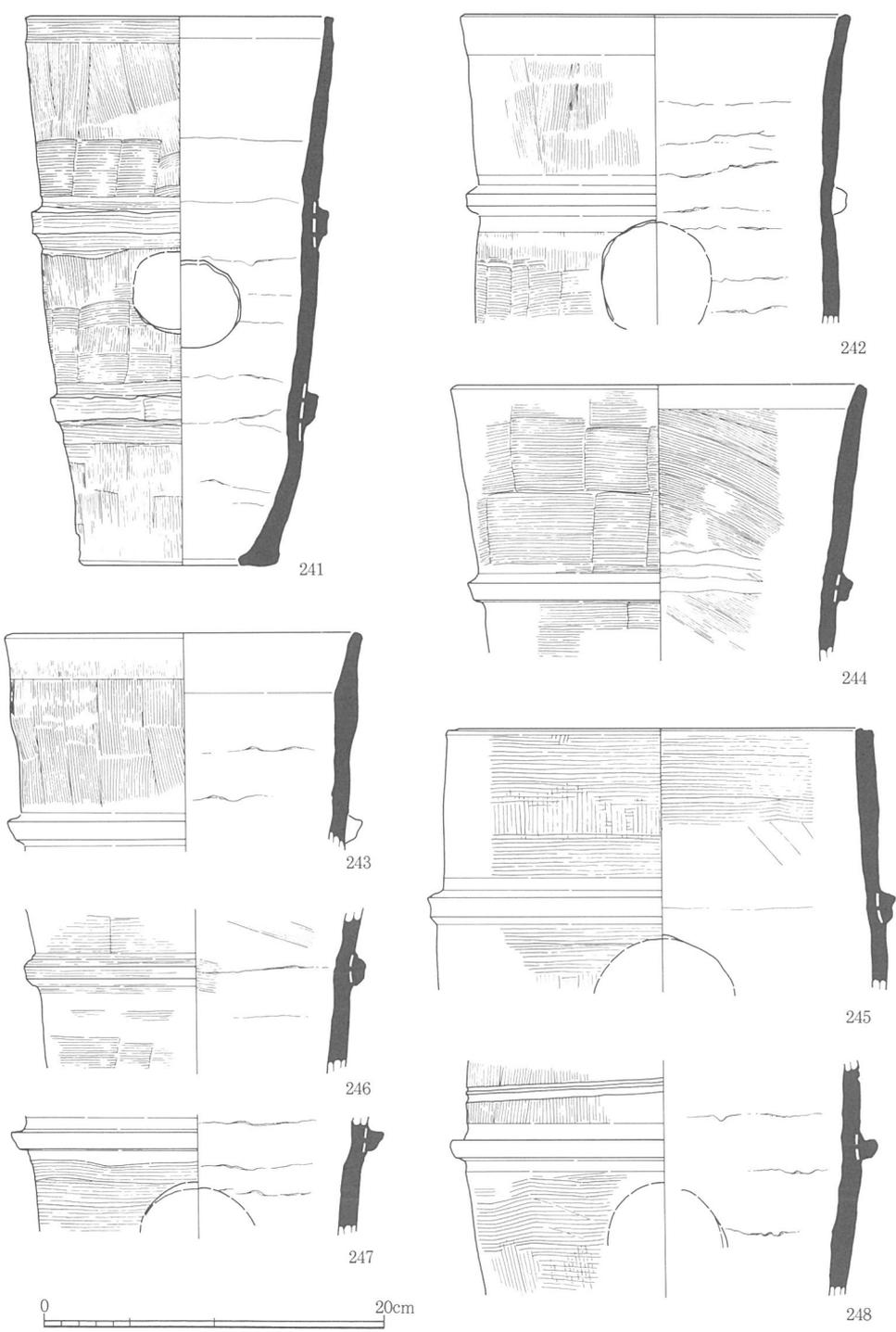
251～254は底部まで残存する最下段部の破片である。焼成は252が須恵質で、他は土師質である。外面調整はいずれも縦ハケで、底部付近は横ナデによって仕上げる。内面はナデ、底部は252が未調整、253・254には指頭圧痕が残存する。なお、251は表面剝離のため調整の観察は行えなかった。

朝顔形埴輪（第44図）

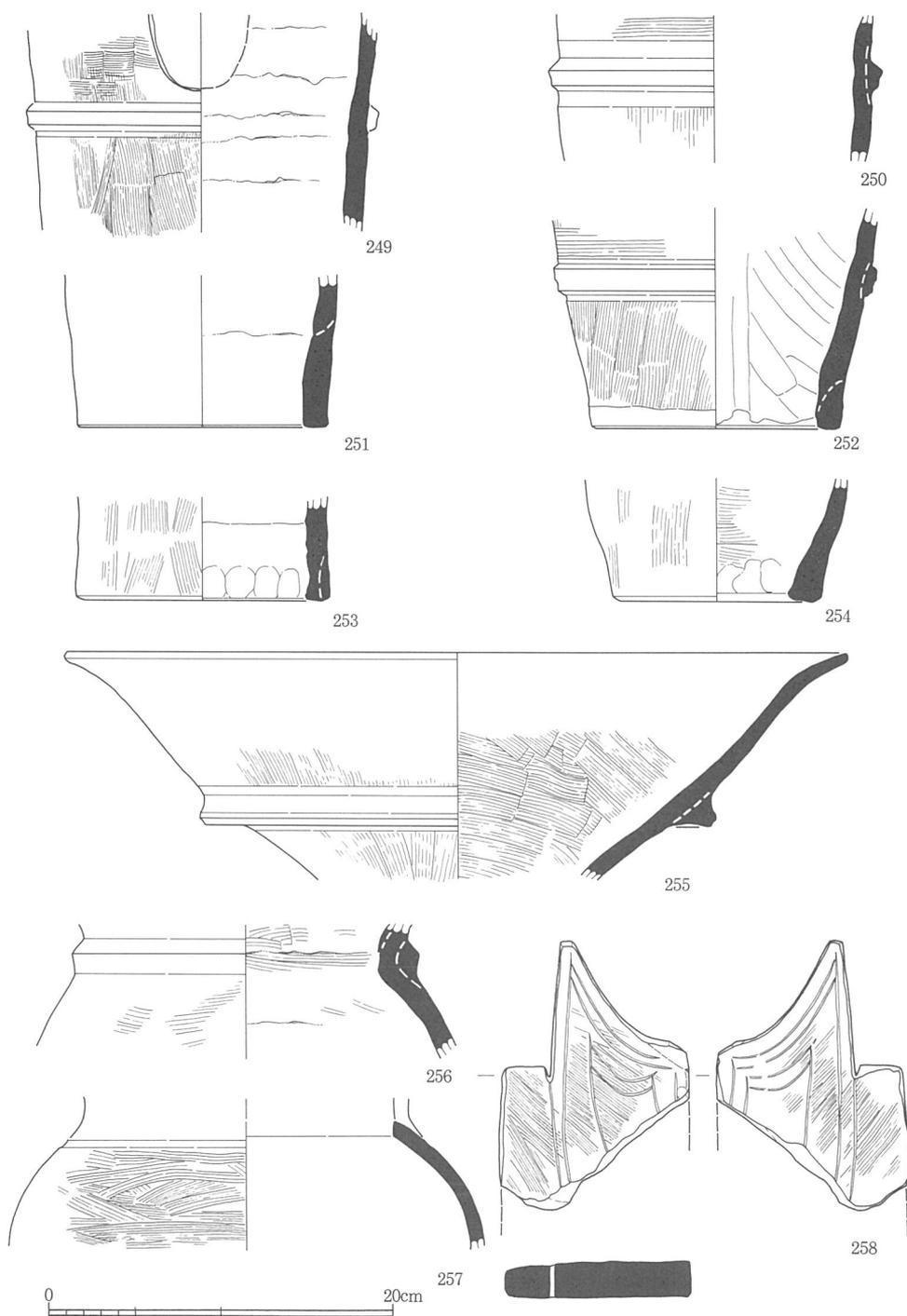
円筒埴輪に比べ出土数は少ない。3点（255～257）が図示されたが、焼成はいずれも土師質である。

朝顔部255は口縁部と頸部の境界に一条のタガが巡る。ハケ調整は外面が放射状に、内面はほぼ口縁部に沿うように数回に分けて施す。

256・257は円筒部の上端付近の破片である。257は欠損するが朝顔部と円筒部の境界に



第43图 5号墳 (251-OG) 出土埴輪 1



第44图 5号墳(251-O G)出土埴輪2

タガを巡らす。調整はいずれも外面が横ハケ、内面はナデである。円筒部2段目や底部付近の透かしの形状、調整については不明であるが、外面のハケ調整は円筒埴輪と同様数種のもの混在すると推定される。

形象埴輪（第44図）

形象埴輪の出土数は少ない。図示した258は衣蓋形埴輪のたち飾り部と推定される小破片で、両面に線刻がある。他に図示はしていないが鳥形埴輪と推定される小破片も出土している。

6号墳【252-OG】（付図3，第42図，図版9・23）

3号墳の南東に位置する。墳丘は後世の土取りにより大きく破壊されているが、周溝の北西コーナー部が検出されたため方墳であったことが判明した。規模は残存状況は悪いが、5号墳とほぼ同規模と推定される。周溝は残存部で幅1.3～1.7m、深さ0.15～0.25mでコーナー部が他より若干深くなる。

遺物は前述のコーナー部から完形に復元される須恵器の無蓋高杯2点（232・233）と壺の口縁部片1点（234）が出土した。これらの遺物は周溝底面より遊離した状況で出土している。また、当古墳では埴輪類が出土していないが、古墳の残存状況が悪いためその有無については不明である。

第Ⅵ章 遺跡の検討

1980年代後半から本格化した泉北地域における近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、わが国における須恵器生産を解明する上で重要な遺跡が数多く発見された。伏尾遺跡もその中ひとつであり、ここでは当遺跡から出土した遺物・遺構を検討することにより陶邑の成立と構造について考える。

第1節 遺物の検討

1. 陶邑における最古段階の須恵器

初期須恵器研究は多くの研究者によって取り上げられ、大きな成果が上げられているが、中でも陶邑の果たした役割は大きい。

陶邑の調査を担当した田辺昭三氏はわが国の須恵器の最古型式としてT K73型式を設定され、器形・文様・製作技法に陶質土器との共通性が認められることを最古型式の特徴とされた。さらに、その後大阪府教育委員会で陶邑を大規模に調査した中村浩氏もT K73号窯を中心とした一群を最古型式とし、I型式1段階として設定された。最古型式の特徴としては、製作手法が伝わって時日を経ているため一定の規格性を伴わない、いわゆる形の定まらない段階と規定された。

また、両氏はT K73号窯の遺物は最古型式の範疇に含まれるが、決して最古の須恵器ではないことも推定されている。田辺氏は一須賀2号窯の遺物がその特徴からT K73号窯より遡るとし、前者をT K73型式の古相、後者を新相として捉えた。言及はしていないが、陶邑内にT K73号窯に先行する最古の窯の存在を示唆したものと理解される。一方、中村氏は一須賀2号窯は必ずしもT K73号窯に先行する遺物とは考えなかったが、陶邑内にT K73号窯に先行する窯跡の存在を指摘した。

これらの考えが発表された後、陶邑における最古の窯は未発見のままであった。ところが、西日本各地では陶質土器の特徴を備えT K73号窯に先行する須恵器を出土する窯（吹田32号窯・三郎池西岸窯）や墳墓（池の上・古寺墳墓群）が相次いで発見され、須恵器生産の多元的な始まりが指摘された。このうち、藤原学氏は、陶邑の初期須恵器は鋸歯紋などのへら描き紋がなく、最古段階からすでに形態変化の進んだものとし、さらに前述した

窯が瀬戸内海沿岸部に分布することに注目し、わが国における須恵器生産は西日本各地で多元的に始まり、陶邑で列島化したものを製作し始め、中心的な生産地となったと考えた。

しかし、1991年陶邑でもT K73号窯に先行すると考えられる窯跡が調査された。大庭寺遺跡で発見されたT G231・232号窯である。両窯は窯本体は完全に削平されていたが、灰原を検出したことにより窯の存在が明らかとなった。

両窯の須恵器の特徴は器形・文様・製作技法に陶質土器と共通するものが多く見られることである。前述した西日本各地で発見された初期須恵器窯とはほぼ同時期のものと考えられ、陶邑の中にも最古段階の須恵器窯が存在したのである。さらに、灰原の遺物の量からはその生産規模は西日本各地の窯を卓越した規模であることもうかがえた。

つまり、須恵器のはじまりを現象的にみれば多元的であるが、その生産規模を考えた場合、陶邑は他を卓越した存在であり生産開始時から陶邑がその中心、中央窯として位置していたものと考えられた。

2. 陶邑における須恵器の列島化

前項でのべたように、T G231・232号窯（以下T G231・232号）の遺物は陶邑で最古段階に位置づけられるものであった。ここではこれらの遺物群とT K73号窯（以下T K73号）の遺物群を器種構成、紋様、製作技法などを比較することによって、須恵器の列島化について概観する。

器種構成

T K73号にみられT G232号でほとんどみられない器種は樽形甗のみで、他の器種については両窯とも出土している。しかし、細かい部分まで比較するとその特徴が明らかに異なる。

杯はT K73号では比較的多く出土する器種であるが、T G232号では数点出土したのみである。さらにT G232号の杯は、いわゆる土釜形と呼称されるよう比較的類似した器形をなすT K73号のものとは異なり、受部が短いなど蓋が伴うものか疑問視される特異な形態のものである。高杯はT G232号では有蓋高杯、無蓋高杯など多くの形態のものが出土している。一方、T K73号では有蓋高杯がほとんどみられず、無蓋高杯もT G232号ほど多形態のものは焼成していないと推定される。壺も高杯と同様で、T K73号では数形態しかみられないが、T G232号ではその形態バラエティに富んでいる。

このように、有無の視点で両者を比較すると大きな違いは見いだせないが、細部まで比

較するとT G232号は多くの形態（器形）のものを、T K73号は限られた形態（器形）のものを生産していたことがうかがえる。

また、T G232号にはT K73号とは比べものにならないほど多くの陶質土器と共通した器形のものが含まれることも器種構成の大きな特徴である。

紋様

T G232号では、波状紋の他に刺突紋や鋸歯紋、組紐紋、斜格子紋など陶質土器にみられる紋様が多く見られる。一方、T K73号では陶質土器にみられた紋様はほとんど見られず、ほとんど波状紋で統一されている。

製作技法

まず、甕や壺の胴体部に残されたタタキ調整を比較する。T G232号では平行タタキの他縄席タタキ、格子タタキがあるが、T K73号は縄席タタキは見られず、そのほとんどが平行タタキで統一されている。

次に陶質土器と共通する大型甕の底部のしぼり目を観察すると、T G232号にはしぼり目が存在するが、T K73号ではその存在は確認されていない。

このように器種構成・紋様・代表的な技法で両窯の須恵器を比較すると、T G232号ではその多くに陶質土器との強い共通性が認められるが、T K73号はT G232号に比べその共通性は強いとは言いがたい。

わが国の須恵器生産は半島の渡来工人を中心にして開始され、生産開始当初は陶質土器に近い製品を生産したと推定される。T G232号の中により陶質土器に近い製品を見いだすことができ、T G232号の時期は生産開始時により近い時期に求めることができる。一方、T K73号はT G232号に比べると陶質土器との共通性は弱い。さらに、蓋杯の顕在化やT G232号に比べ後続時期の須恵器に形態変化のたどれるものが多く見られることからT G232号よりは後出する時期のものと位置づけることが可能である。また、T K73号はT G232号に比べ限られた器形のものを生産したことを重視するなら、T K73号の時期に器形の統一化が大きく進行したと推定することができる。

これらのことから、T G232号の時期は半島からの陶質土器生産技術の導入期、T K73の時期は須恵器の列島化が大きく前進した時期と位置づけることができ、大庭寺遺跡の報告では前者をT K73型式に先行する型式としてT G232型式を設定した。

ただ、T G232号から直接T K73号に至る訳ではなく、これらの2型式はさらに細分される可能性がある。大庭寺遺跡の調査で確認されたT G232号から継起的な形態変化の追

えるものや、ON231号窯からの出土例である。今後これらの遺物群が分析されることにより、TG232型式からTK73型式に至る状況が把握され、須恵器の列島化の様相がより明確になるものと期待される。

次に列島化が大きく前進した時期と捉えたTK73型式以後についても触れておく。

TK73型式以後の須恵器の編年については、前述した田辺氏や中村氏によってほぼ完成されている。このうち田辺氏はTK73型式-TK216型式-ON46型式-TK208型式に至る編年を示され、TK208型式を定型化した須恵器の一群として位置づけられた。

これらの研究により列島化に向かう須恵器の形態変化が明確となった。

これらを簡単に概観すると、TK73型式は前述したように列島化に向けて大きく前進している。しかし、その一方で形態や技法には前型式(TG232型式)の特徴が部分的に残存するものが存在しており、この段階で完全に列島化が完成されたわけではない。前型式の特徴が見られることはTK216型式になっても同様である。しかし、TK73型式に比べるとその数は減少し、当型式では底部を回転ヘラケズリで仕上げる丸底の杯身が出現するなど、各器種でTK73型式よりも後続型式に連続する形態のものがより多くみられるようになる。TK216型式はTK73型式からより列島化が進み、定型化したTK208型式に連続していくことがうかがえる。なお、TK208型式にも古い段階の特徴を備えたものが存在している。列島化の中にも伝統的な技法や形態が残存したものと推定される。

以上、TG232型式とTK73型式の比較、TK208型式に至る形態変化を概観することによって須恵器の列島化が明らかとなった。このうち特にTK73型式を契機に須恵器の列島化が大きく前進したことが明確になったことは重要である。また、この列島化は単に須恵器の形だけの問題ではなく、わが国の須恵器生産の方向性が確定し、本格化したこと示すものとして理解できる。

3. 伏尾遺跡の初期須恵器

伏尾遺跡からは数多くの初期須恵器が出土している。ここではその時期的な特徴について明確にする。

今回の調査区で、出土状況からみて比較的良好な資料は土坑1の出土品である。この遺物群を概観すると、その諸特徴から多くはTK216~TK208型式の古相までの範疇に含まれると推定される。

この状況は包含層の遺物を概観しても同様である。

しかし、若干ではあるが遺構・包含層とも T K 216 型式より古相の特徴を備えたものも存在する。代表的な例が底部は平底の杯身 7・9、天井部が沈線と刺突紋で飾られる蓋 86、口縁部を大きく外反させる高杯形器台 118 などである。

これら古相の特徴を備えた遺物群については、T K 216 型式より時期的に遡る遺物とする考えと、T K 216 型式の範疇で捉え部分的に前段階の特徴が反映されたものが残存したとする考えの 2 者が想定される。

各土器について詳細に特徴を観察すると、まず杯身 7 は底部が平底であるがすでに丸底へ移行する傾向が看取され、T K 216 型式の範疇に含まれるものと推定される。一方、杯身 9 は完全な平底である、蓋 86 は紋様だけでなく断面形もより古相の様相を備えている、器台 118 は口縁部の外反、杯部の断面形に膨らみを持つ、脚裾部が大きく開く、脚部の透かしが千鳥であるなど、T K 216 型式の範疇に含めるより、遡るものとする方が妥当である。この T K 216 型式を遡る遺物の存在によって当該時期の遺構の存在が推定されよう。

前調査の資料も含め出土遺物から伏尾遺跡全体を概観すれば、その中心は T K 216～T K 208 型式の古相にあり、この期に伏尾集落が大きく展開したことは明確である。さらに今回の調査では、これ以前に遡る遺物群の様相も明らかとなった。この様相は、伏尾集落が大きく発展する以前における須恵器生産との係わりを示すものであり、集落の動向を考える上で重要な資料と言えよう。

また、陶邑における須恵器生産の始まりとその列島化の中で伏尾遺跡の初期須恵器を考えると、まさに列島化がより大きく進行した時期と一致する。後述もするが伏尾集落の発展は、須恵器の列島化とともに進行する生産の拡大に起因するものと結論づけられる。

第2節 古墳時代中期における伏尾集落の位置づけ

伏尾遺跡の調査では、弥生時代から近世に至る遺構が数多く検出された。このうち特に古墳時代中期の集落は、遺構や遺物の様相から判断して須恵器生産に大きく関与した集団の集落であることは明確である。ここでは、当期の伏尾集落の構造を明らかとし、当集落から陶邑の動向について検討する。

1. 伏尾集落の構造

まず、1986年度に調査を行った丘陵部における集落について概観する。

丘陵部で検出された遺構には掘立柱建物、竪穴住居、溝などがある。

掘立柱建物は調査区のはほぼ全域で約30棟検出されているが、その平面形は、正方形と長方形を呈するものがある。

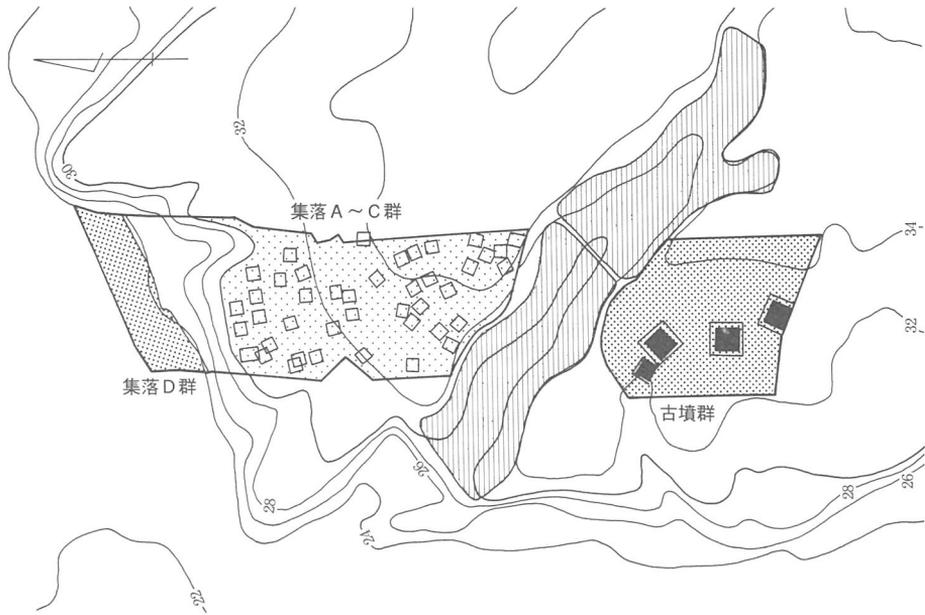
正方形のものは、総柱構造で倉と考えられるものと1間×1間あるいは1間×2間の小規模な納屋のような建物と考えられるものが混在する。倉と考えられるものは合計12棟検出されているが、その面積は20㎡前後、15㎡前後、7～9㎡のもの3種類が認められる。納屋のような建物と考えられる小規模建物は6棟検出されている。

長方形を呈するものは、桁行きと梁行きの比率から何種類かに分けられるが、構造的には、桁行きが2～3間、梁行きが1間で、梁行きが桁行きの柱間に比べて著しく広いものと、2間×2間の総柱構造のもの2者が存在する。前者は住居、後者は倉の可能性の高いものである。

竪穴住居は3棟検出されている。平面形は方形を呈し、いずれも造り付けのカマドを持つ。住居内の出土遺物からみて掘立柱建物と共存したものと推定される。

土坑は約80基検出されているが、規模によって大型、中型、小型ものに分類される。平面形は、大型のものは不定形を、中・小型のものは楕円形や円形を呈するものが多い。また、これらの土坑の中には、埋土や遺物の出土状況から判断して、その性格が推定できるものがある。代表的なものを提示すると、大型で多量の土器が投棄された状況で出土し廃棄用土坑と推定される土坑1、完形の杯などを意図的に納めた祭祀的性格を持つ土坑4・6、埋土に炭や焼土を多量に含み土坑内で火を使用した可能性のある土坑7・9などである。

溝は約10条検出されているが、その規模によって大型のものと小型のものに分類される。大型のものは2条検出されており、いずれも幅約50cm、深さ30cmの規模を持つ。出土遺物



第45図 伏尾遺跡の地形と集落と古墳の関係

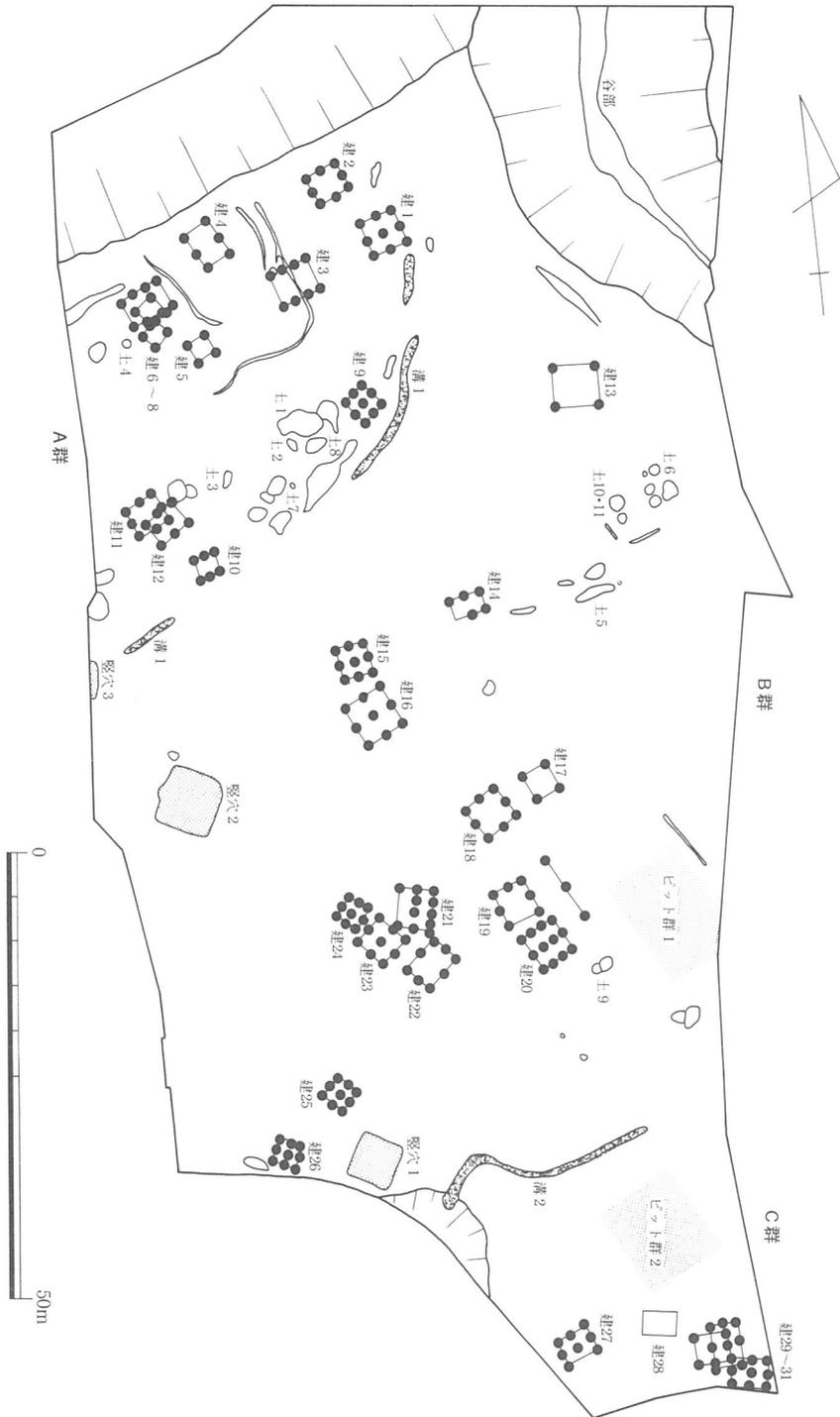
には時期差が認められるが共存した時期もあったと推定される。小型のものは幅約20cm、深さ20cm程度で、完形の須恵器の出土したものがある。

集落全体の構造は、第46図に示したように大型の溝1・2により、集落をA～C群の3つの単位に分けて考えることができる。

A群は丘陵の北端部に位置し、丘陵平坦部を中心にして掘立柱建物が10棟、竪穴住居が1棟検出されている。

掘立柱建物は基本的に住居、納屋、倉で構成されるが、これらの建物には重複関係も認められ詳細な同時並存性を踏まえた上での構成を把握することは困難である。しかし、建物の位置関係、方向性など全体的な視点で観察すれば、住居と納屋と推定される建物が接近して位置し、方向性もほぼ一致しセット関係と考えられる単位や、倉のみで構成される単位は看取される。

さらに土坑の分布状況をこれに合わせて検討してみると、住居と考えられる建物の周辺には祭祀的性格をおびた土坑が分布し、倉の周辺にはそのような土坑の存在は確認されない。また、廃棄用大型土坑や土坑内で火を使用した可能性のあるものは建物9の西側に集中することが指摘できる。この大型土坑の出土遺物には、軟質系土器の長胴甕や平底鉢、深鉢など日常土器が他の土坑に比べ多く認められることを考慮すれば、この建物を中心と



第46図 伏尾集落（古墳時代中期）の概略図

した周辺を、日常生活に関係した共同の作業場のような空間として捉えることも可能である。

竪穴住居は1棟しか検出されていないが、掘立柱建物群の西側に位置し、立地の状況からみる限り両者は隔絶していることが指摘できる。

B群はA～C群の中央に位置し、地形的には丘陵の標高が最も高く比較的広い平坦面もった良好な場所である。

基本的な建物の構成はA群同様掘立柱建物と竪穴住居である。掘立柱建物群については若干の主軸の方向性の違いはみられるものの、A群と同様に2～3棟で構成される単位が数カ所認められる。しかし、全体をA群と比べると、倉と考えられる建物が多く存在し、その規模も多種に及ぶことが看取される。またB群では住居と推定される掘立柱建物については数棟しか確認されていないが、土坑の分布状況や柱穴の密集状況などから、ピット群1などは住居としての建物としてまとまる可能性が高く、現在確認されている以上に建物が存在したことは確実である。

竪穴住居は2棟検出されているが、A群同様掘立柱建物の西側、丘陵の縁辺に位置し、立地面や数の上からみるかぎり掘立柱建物群との隔絶が認められる。

C群は丘陵東端部に位置し、掘立柱建物が数棟確認されているが、調査区の都合上集落構造を検討するための資料は得られていない。ただ、周辺の地形などから判断してA・B群に比べ小規模であったと推定される。

次に今回調査を行った平地部である。ここではD群として扱う（第45図参照）。

D群の集落構成は2基の大型方形土坑の周囲に倉や納屋と推定される小型の掘立柱建物が十数棟配置された状況が看取される。土坑に着目すれば2基の大型土坑の他には、A・B群でみられたような完形の土器が出土した祭祀的性格のものや、埋土に炭や焼土がレンズ状堆積あるいは充満した状況を呈し日常生活に関係したと推定されるものは検出されていない。また、A・B群では建物の周辺にいろいろな土坑が分布していたが、D群では2基の土坑を中心に建物が配置されていると言える。さらにD群では竪穴住居も検出されていない。このような状況からD群の集落性格は居住単位とされるA～C群と異なることは明らかである。検出された遺構の状況や、石津川の支流である陶器川に隣接し当時の水路交通に適した場所であるなどの立地面を考慮すれば、D群は陶邑・深田遺跡で確認されたような須恵器の選別、流通に関連した作業場のようなエリアであった可能性が高いと考えられる。

丘陵上あるいはその周辺を中心に展開する伏尾集落は、遺物の検討でも明らかのように

その存続期間は短期間であるが、突如としてTK216～208型式期に集落規模は大規模化する。さらに、集落構造の詳細な検討からは、居住や流通に関係した単位の存在が明らかとなり、これまでの調査では確認されていないが本調査区の隣接地に窯や工房の存在も予想される。伏尾集落は須恵器生産の拡大に起因して、計画的に開発され大きく発展した集落とすることができよう。

一方、須恵器製作集団の組織の問題まで言及すれば、伏尾遺跡は単に製作工人によって組織された集団の集落とは考えにくい。集落構造、遺物、古墳の存在などから考えると、伏尾集団は須恵器生産から流通に至る須恵器生産一連の作業工程の上に成り立った単位で組織構成された可能性が高いとされる。さらに古墳群の状況からは集団の統括者（首長層）の存在も読みとれ、伏尾遺跡は中央政権の強い掌握の上に成り立った陶邑の中でも、中心的な集落として捉えることが可能である。

なお、伏尾遺跡における渡来系集団との関係であるが、半島色の強い日常土器である軟質系土器が数は少ないが出土しており、当集落にも渡来系集団あるいは渡来系集団の系譜を引く集団も存在したことは確実視される。

2. 周辺集落の様相

泉北丘陵の調査では、伏尾遺跡の他にも陶邑成立過程の一端を示す集落が発見されている。ここでは大庭寺遺跡、万崎池遺跡、小阪遺跡、深田遺跡、野々井遺跡を取り上げてその概要を示す。

【大庭寺遺跡】 榎丘陵の北東部縁辺に位置し、遺跡の東側には石津川が蛇行しながら北流する。調査では初期須恵器窯、竪穴住居、溝、土坑、土器溜り、河川などが検出され、初期段階の須恵器生産集団の集落の様相が明らかとなった。

初期須恵器窯は窯本体は削平されていたが、灰原を検出したことにより2基の窯（TG231・232号窯）が近接して存在したことが確認された。

居住域は石津川に面した丘陵縁辺部で、竪穴住居が集中して6棟検出され明らかとなった。また、この居住域の北縁は溝によって区画され、域内には住居の他に井戸や土器と共に粘土塊が出土した落ち込みが、域外では土坑墓の存在が確認されている。

土器溜りは居住域より窯跡に近い場所で2カ所（1・393-O L・）確認され、初期須恵器や軟質系土器が多数出土している。このうち393-O Lの出土須恵器の中には、灰原の出土品よりも焼け歪みの度合いの小さい完形品に近いものが多く含まれており、二次的

な選別作業がこの土器溜まり周辺で行われた可能性が示唆された。

河川（56-O R）は居住域の立地する丘陵縁辺に沿って流れ、川幅約60m、深さ約5 mを測る。この河川は集落の立地条件や当時の交通手段を考慮すれば須恵器の流通路としての役割も果たしていた可能性が高い。

遺物はこれらの遺構に伴い良好な状況で出土した。このうち初期須恵器はT G 232型式～T K 216型式までのものがある。

最古型式であるT G 232型式期に属するものには、T G 231・232号窯、393-O L、居住域ものが相当する。T K 73型式に属するものは1-O Lの古相、河川（56-O R）のものが相当し、当期以降、形態的・技法的に陶質土器の系譜を反映したものは激減してゆく。蓋、器台など器種によってはT K 73型式より遡る特徴が部分的に認められるものがあるが、大庭寺遺跡ではT G 232型式期の伝統的な要素が反映した結果と考えられる。T K 216型式期は1-O Lの新相のものが相当する。

他に、大庭寺遺跡の遺物の特徴として、多量の軟質系土器の出土が上げられる。軟質系土器は半島系の日常土器であり、渡来系集団との強い関係を示すものである。大庭寺遺跡における基本的な器種構成は平底鉢、甌、長胴甕でT G 232型式期からT K 216型式期を通じて見られる。土師器との比率は後期ほど土師器が増加する傾向が見られるが、いずれの時期も軟質系土器を使用していたことが当集落の特徴である。

このように大庭寺遺跡の調査では、生産・選別・流通・居住の場が確認され、初期段階の集落構造が明確となったが、このうち特に近接して存在する2基の窯が確認されたことは重要である。2基の窯が時間差をもって操業したか、同時操業したかの問題はあるが、いずれにしてもその生産規模は西日本の瀬戸内沿岸部で確認されている初期須恵器窯と比較して大規模であったことは確実であり、須恵器生産開始時からその中心が陶邑であったことがうかがえた。

一方、出土遺物では、製品の須恵器からは、出現当初は陶質土器の系譜の強い製品を生産した大庭寺遺跡も、それ以後は急速に列島化した須恵器を大量生産していく陶邑窯の動向と一致していることが明らかとなった。さらに、日常土器として使用された軟質系土器の様相からは、大庭寺遺跡は渡来系集団を中心にして成立し、その後の発展にもこの伝統的な系譜を強く引く集団によって支えられていたことも明らかとなった。

【万崎池遺跡】 梶丘陵上に位置する。竪穴住居13棟、掘立柱建物3棟が検出されている。出土遺物はそのほとんどが土師器であるが、T G 232型式に属すると推定される筒形器台

や縄席紋と螺旋状沈線で飾られた壺などが数点出土している。半島色の強い軟質系土器はほとんど出土していない。

【小阪遺跡】 高蔵丘陵の先端部、石津川と陶器川の合流点付近の平地部の微高地上に立地する。集落規模は小さく平地式住居も含め竪穴住居が8棟、掘立柱建物3棟、井戸などが検出されている。竪穴住居の中には竈を有するものが存在する。

出土遺物には初期須恵器、軟質系土器、土師器、当て具などがあり須恵器製作集団の集落と考えられている。出土した須恵器はおおむねTK73型式～216型式に比定され、比較的短期間に営まれた集落と推定される。日常土器の軟質系土器の構成比は平底鉢、甗が多く長胴甕は少ない傾向が認められる。

その他にも小阪遺跡の特徴として、須恵器の中に土師器の形態をもつものが多く存在することや、土師器の出土量の比率の高いことが上げられる。大庭寺遺跡とは生産集団の構成が異なると推定される。

【深田遺跡】 石津川に面した平地部に立地し、背後の丘陵にはTK73号窯が築かれている。検出された遺構には方形の大型土坑、掘立柱建物、溝などがある。方形土坑の遺物出土状況や倉庫と考えられる建物の存在、遺跡の立地条件からは一般集落とは考えにくく、須恵器の流通に関連した遺跡と捉えられている。遺物の時期はTK216～208形式期に比定される。

深田遺跡の状況は、立地や遺構の状況が伏尾遺跡の平地部(D群)と共通する。伏尾遺跡同様、調査地周辺の丘陵部には集落の主となる居住域の存在する可能性が高い。

【野々井遺跡】 梶丘陵の西側、石津川の支流である和田川に向かって延びる丘陵上に立地する。掘立柱建物を中心に展開する集落や古墳群の存在から、梶丘陵の代表的な集落であったことがうかがえる。

集落と古墳群の関係は伏尾遺跡と類似するが、野々井遺跡は5世紀後半から6世紀後半頃まで存続し、短期間に営まれた伏尾遺跡とは異なる。また、出土遺物の中にも軟質系土器はほとんどみられない。

3. 陶邑の動向

陶邑に展開する集落は各時期、各遺跡によって集落構造や遺物の様相に差異がみられる。ここでは各時期の特徴について示し、陶邑の動向について明らかにする。なお、時期については便宜上初期須恵器の型式をそのまま使用する。

T G 232型式期

陶邑で須恵器生産が開始された時期で大庭寺遺跡や万崎池遺跡などが代表的な例である。

大庭寺遺跡の須恵器や軟質系土器の様相から、須恵器生産に渡来系工人の直接的な関与が明らかとなった。さらに、灰原の状況からは須恵器生産が開始時から大規模に行われたことも確認された。大庭寺遺跡の状況は、まさしく渡来系集団を中心として営まれた、専門生産集落の様相として理解される。

一方、同じT G 232型式期の集落でも万崎池遺跡の状況は異なっていた。出土遺物には初期須恵器が数点認められるものの、そのほとんどは土師器で占められ、渡来系集団との関係が示唆される軟質系土器の出土も確認されていない。集落立地や構造も前代の泉北丘陵における一般的なものであった。これらの様相からは、万崎池遺跡が泉北丘陵の伝統的な集落でありながら須恵器生産には間接的に係わり、大庭寺遺跡のような専門集団の集落を補助するような役割を担った集団であったと推定されよう。

陶邑では初期の段階から前述したような集団関係が推定され、有力権力の関与・把握の上に成り立った開発が行われたこともうかがえる。

T K 73型式期

当期には生産集団の状況が多様化する。

大庭寺遺跡はT K 73～216型式期に至り、他遺跡（窯も含む）に比べ、前型式の伝統を部分的に残存させるものの、その大半は列島化の進行した須恵器を生産した。しかし、集団構成を日常土器から検討すると、土師器が使用される割合が前段階に比べ増加するものの、その中心は軟質系土器にあり、この期にも伝統的な渡来系集団が主体であったことがうかがえた。

ところが、新たに当期になって出現する小阪遺跡は大庭寺遺跡とは様相が異なっていた。小阪遺跡では堅穴住居における竈の採用、平底鉢・甌などの軟質系土器の出土などから渡来系集団の存在がうかがえる。しかしその一方で、土師器の形態をもつ須恵器が大庭寺遺跡に比べ多く認められること、軟質系土器の煮沸具である長胴甕が少なくその出土量から煮沸具には土師器を用いたことが推定されることなど、倭の様相も顕著に認められる。小阪遺跡の様相は渡来系工人だけでなく、倭系工人も須恵器生産に大きく関与した状況の集団関係を示すものと理解されよう。

T K 73型式の須恵器は前項でも述べたように、陶質土器の系譜を残すものも部分的に残存する。しかし、列島化の現象が進行し、後続型式につながる器種構成の完成もみられ、

T G 232型式期に比べ須恵器生産に対する中央政権のより強い直接的な関与と規制が読みとれる。さらに、当期に開窯する窯の増加からも明らかなように、需要に比例してその生産規模も拡大していく。このような状況下、陶邑の中にはT G 232型式期からの伝統的な集落の他、小阪遺跡に代表されるような集団関係を有する専門集団の小規模集落が出現していったと推定される。

T K 216～208型式期

当期の特徴は前段階にはみられない大規模集落の出現である。

代表例が今回調査を行った伏尾遺跡で、前項でも述べたように集落は掘立柱建物を中心に構成され、居住・生産・流通を包括した計画的な集落形成がうかがえる。伏尾遺跡の他にも野々井遺跡や深田遺跡は当期に属し、全容は把握されていないが、部分的に確認されている遺構の状況からは、伏尾遺跡同様大規模集落であった可能性が高い。また、これらの集落の成立要因を考えた場合、当期における集落規模は前段階とは比較にならないものであり、前段階に出現した集落から派生して発展したものとは考えにくい。当期に発展する集落は、T G 232型式期からの伝統的な集団である大庭寺遺跡と比較すると、渡来系集団の色彩は薄い。伏尾遺跡や野々井遺跡が須恵器生産開始前夜に弥生時代からの伝統的な集落を形成していたことなどを重視すれば、当期に至り有力在地集団が積極的に須恵器生産へ関与していったと考えることも可能である。

他にも当期の特徴として古墳群が形成されることがあげられる。現在陶邑では当期以前（T G 232～T K 73型式期）の古墳群は発見されておらず、古墳群が形成されるのは当期以降と推定される。当期以降の集落に古墳を築造できる地位の集団、あるいはその集団の統括者（首長層）の存在が読みとれよう。

本格的に全国規模で須恵器が流通し始めた当期、需要の増大に伴い窯数は急増し陶邑は飛躍的な発展を遂げる。この事実、大規模集落の成立や古墳の様相からもうかがうことができ、陶邑の須恵器生産集団が一定の社会的な地位を確立したことを示唆している。ただ、これらの古墳群は小型方墳を中心として構成され、陶邑全体を総括するような首長墓に比定される大型墳は見あたらない。これらの集落の首長層の地位は、広大な陶邑の一地域に展開する集団を把握した程度と考える方が妥当である。

当期にはこのような集団の集落が陶邑内に拠点的に成立し、本格化した須恵器生産を支えていたと推定されよう。

以上のように、陶邑の初期段階であるT G 232からT K 208型式期の様相は、陶邑の成立

過程を端的に示していると言える。

工人を中心とした生産集団の構成は T G232型式期は渡来系中心、T K73型式期にはこの集団に渡来系と倭系の混在したものが加わり、T K216～208型式期には倭系を中心にした集団が出現し、それぞれに発展を遂げる。一方、集落規模、構造に眼を向けると、T K216～208型式期における計画性、大規模化、古墳群の存在など前段階の集落に比べ卓越していることが注目される。これは集落の性格によるものと考えられ、大庭寺遺跡や小阪遺跡が工人集団を中心とした集落とされるの対し、伏尾遺跡に代表される T K216～208型式期の大規模集落は単純な工人集落ではなく、生産から流通に至る一貫した須恵器生産を包括した集団の集落とされよう。

つまり、陶邑の成立して行く中では、T K216～208型式期の様相が完成した陶邑を示すものであって、T G232～T K73型式期の集落構造や集団関係は陶邑の出現・発展・成立に至る過渡期的な様相を示すものと理解されよう。

参考文献（発行年順）

- 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』390 1971
中村 浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III』大阪府文化財調査報告書第30輯
大阪府教育委員会 1978
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
中村 浩「近畿地方の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』柏書房 1989
『陶邑・伏尾遺跡』A地区（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会 1990
岡戸哲紀「陶邑・伏尾遺跡の検討」韓式系土器研究III 韓式系土器研究会 1991
藤原 学「須恵器生産の展開」『新版古代の日本』5 近畿I 角川書店 1992
『陶邑・大庭寺遺跡III』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会 1993
『須恵器のはじまりをさぐる』（財）大阪府埋蔵文化財協会・弥生文化博物館 1993
『討論会 須恵器の始まりを考える』吹田市立博物館 1993
岡戸哲紀「搖籃期の陶邑」『文化財学論集』文化財論集刊行会 1994
岡戸哲紀「T G232号窯の初期須恵器」『陶邑・大庭寺遺跡IV』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会 1995
『陶邑・大庭寺遺跡IV』（財）大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会 1995
植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第13集 奈良大学文学部文化財学科 1995
『陶邑・大庭寺遺跡V』（財）大阪府文化財調査研究センター・大阪府教育委員会 1996
植野浩三「堂山古墳群と久米田古墳群出土須恵器の検討」『文化財学報』第14集 奈良大学文学部文化財学科 1996

第Ⅶ章 結 語

伏尾遺跡の調査は、1986～1990年の4年間に渡って継続的に行われ、多くの成果が得られた。ここではこれまで調査の総括として簡単にその成果を示しておく。

1 弥生時代

今回の調査では弥生時代の遺構は検出されなかったが、1986・1987年の調査では丘陵上で中期末から後期に至る集落が確認されている。この集落規模はこれまで確認されている泉北地域の集落の中でも比較的大きいものであり、当地域の有力集団の集落であったことが確認された。

しかし、同水系で平野部に立地する拠点的な集落である四ツ池遺跡と比較すると、その規模や内容は比べものにならないほど劣っている。この傾向は泉北丘陵の他遺跡を概観しても同様である。丘陵部における生産基盤の貧弱さを考えれば、泉北丘陵域に四ツ池遺跡に匹敵するような拠点的な集落の存在は考えにくい。四ツ池遺跡と泉北丘陵の諸集落は石津川水系における拠点的な集落と周辺集落、母村と子村的な関係を指摘することが可能である。

2 古墳時代前期

今回の調査では古墳時代前期の遺構は検出されなかったが、1986・1987年の調査では当該期の竪穴住居が数棟検出され集落の存在が明らかとなった。

集落規模については不明な点があるが、周辺丘陵では須恵器出現以前の古墳も存在し、伏尾遺跡周辺に前期から中期（須恵器出現以前）にかけての有力集団の集落が営まれた可能性が指摘される。また、遺構の検討で詳述したが、これらの伝統的な有力集落が須恵器生産が本格化した時期に須恵器生産に大きく関与したことが推測された。

3 古墳時代中期（須恵器出現以後）

古墳時代中期以降、伏尾遺跡の様相は一変し、飛躍的に発展する。その発展の要因は須恵器生産にあり、伏尾遺跡が陶邑の中でも拠点的な集落のひとつであったことが明らかとなった。また、集落構造や古墳群、須恵器や半島系日常土器の遺物の検討からは、陶邑の

成立過程の一端も明らかとなってきた。

以上、簡単に伏尾遺跡の調査成果をまとめたが、多くの課題は残された。

ここ近年、泉北地域では数多くの弥生時代から古墳時代の遺跡が調査され、貴重なデータが蓄積されている。このうち特に初期須恵器を伴う時期の集落の調査成果には眼を見張るものがあり、我が国の須恵器生産と成立を考える上で欠かせない資料となっている。

今後、伏尾遺跡だけでなくこれらの遺跡の成果も含めた遺跡・遺物の総合的な検討を行うことにより、我が国の須恵器生産の諸問題が解決されよう。

圖 版



遺跡上空より百舌鳥野を望む



遺跡上空より泉北丘陵を望む

図版2 平地部の遺構（1990年度調査区）



空中垂直写真



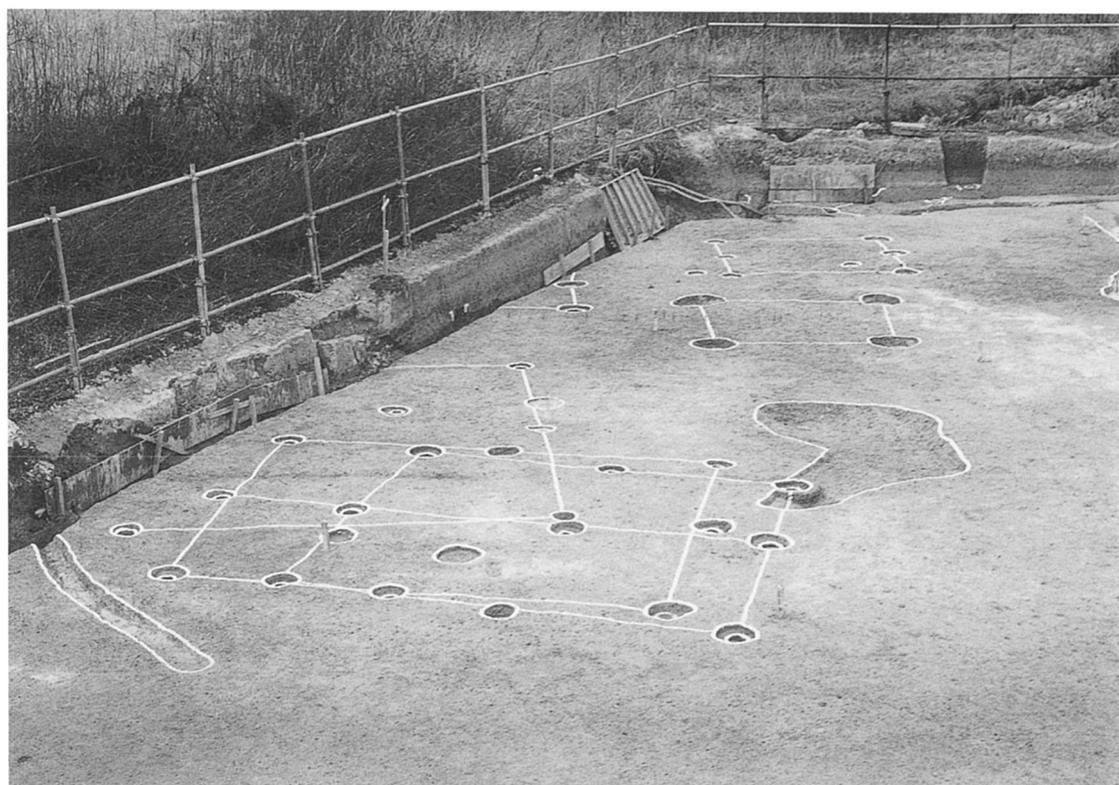
全景（北から）



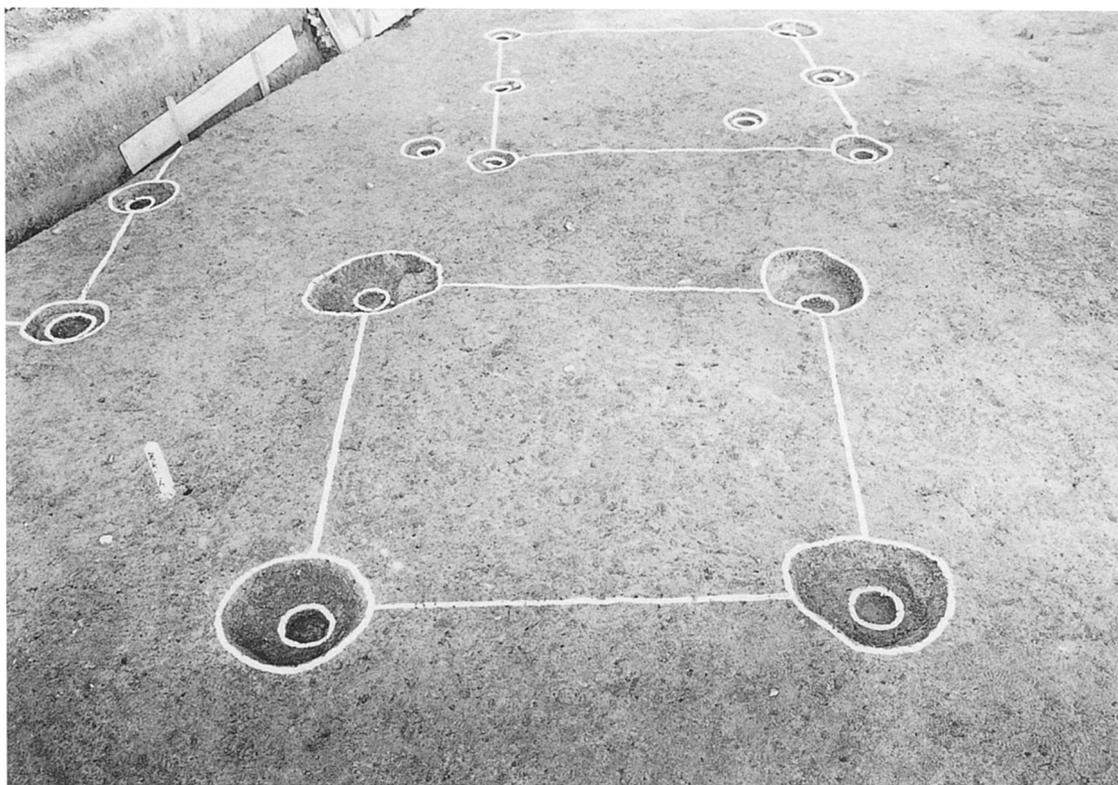
全景（東から）



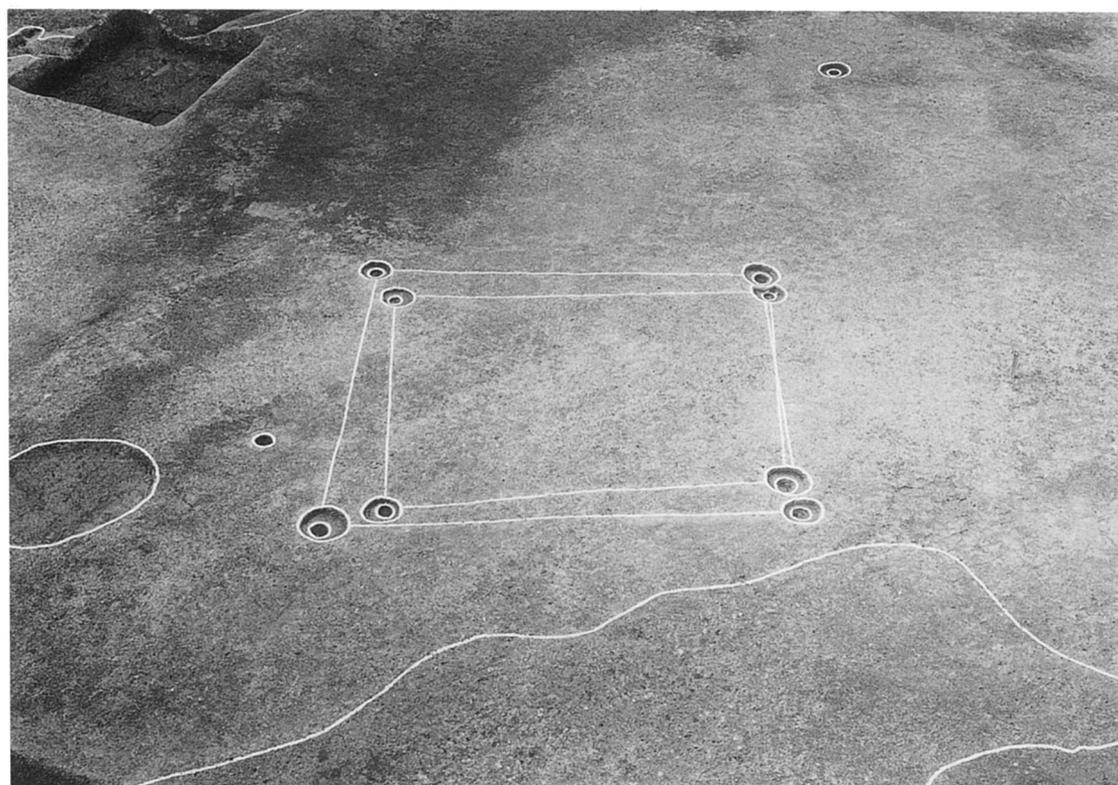
土坑 1・2 と建物 8～12 (北から)



建物 5～7 (南から)



建物1～3（南から）



建物13・14（東から）



土坑1 全景 (南から)



土坑1 遺物出土状況 (南から)



全景



谷部土層断面



全景（北から）



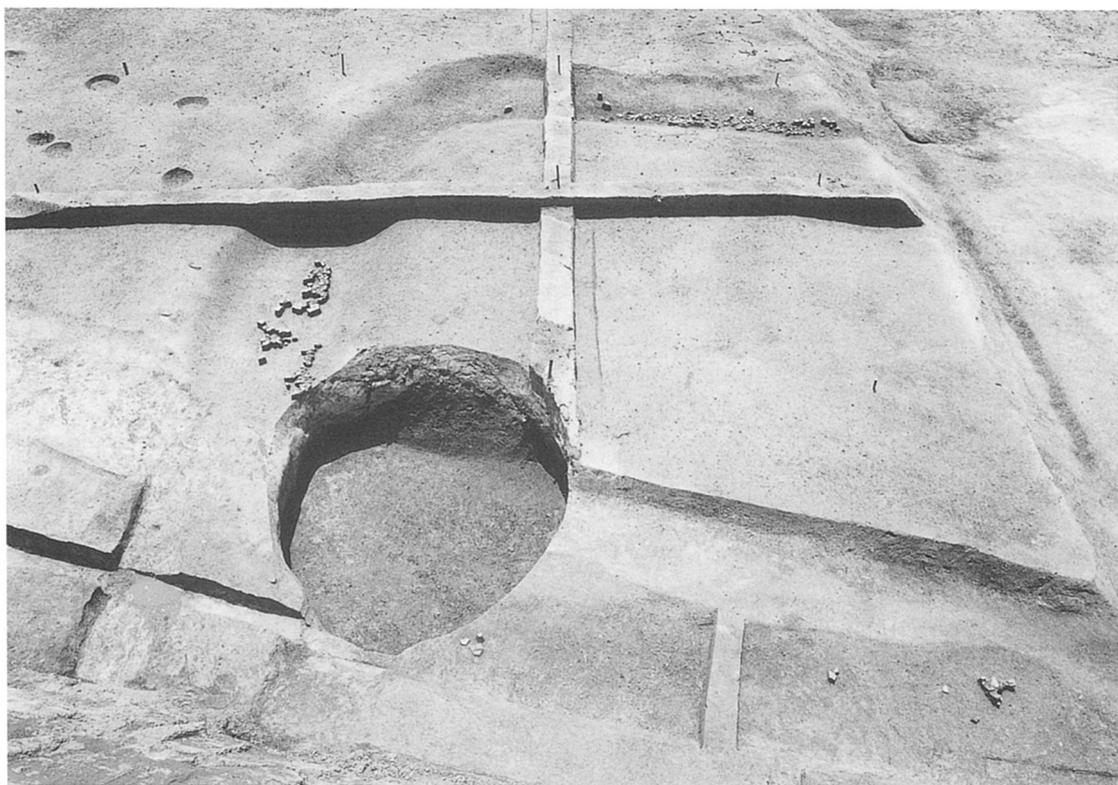
溝群（北西から）



全景（南から）



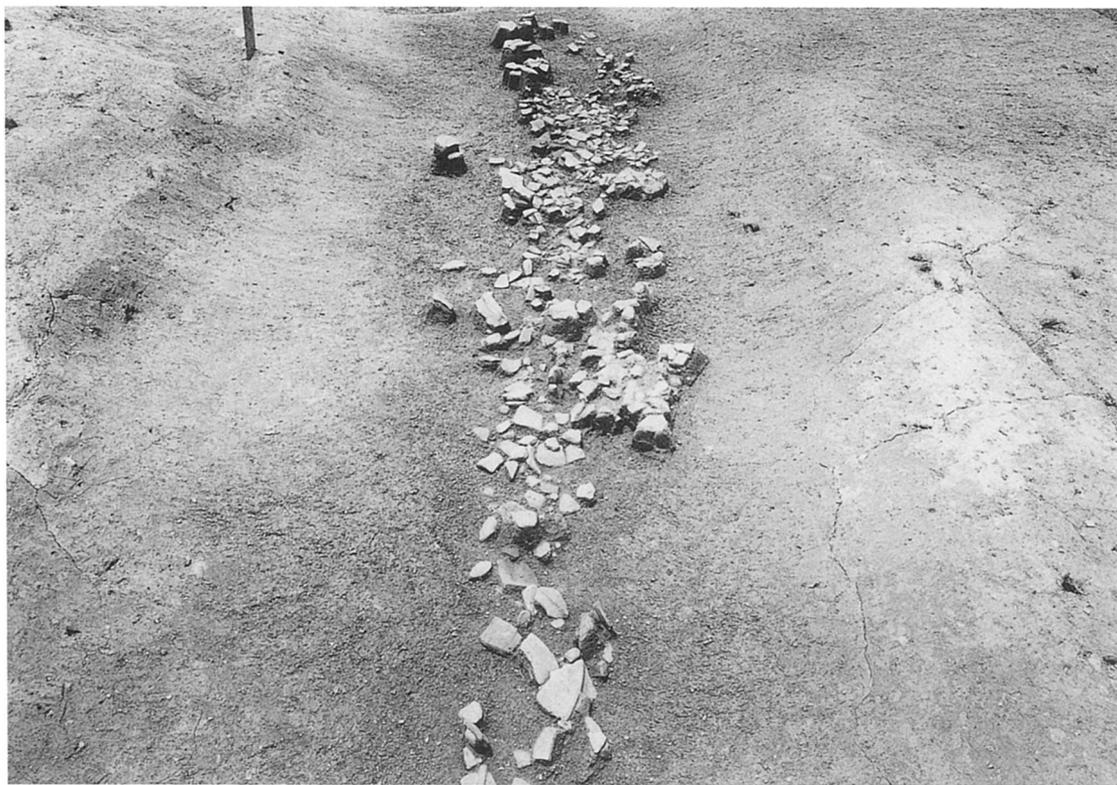
6号墳全景（北東から）



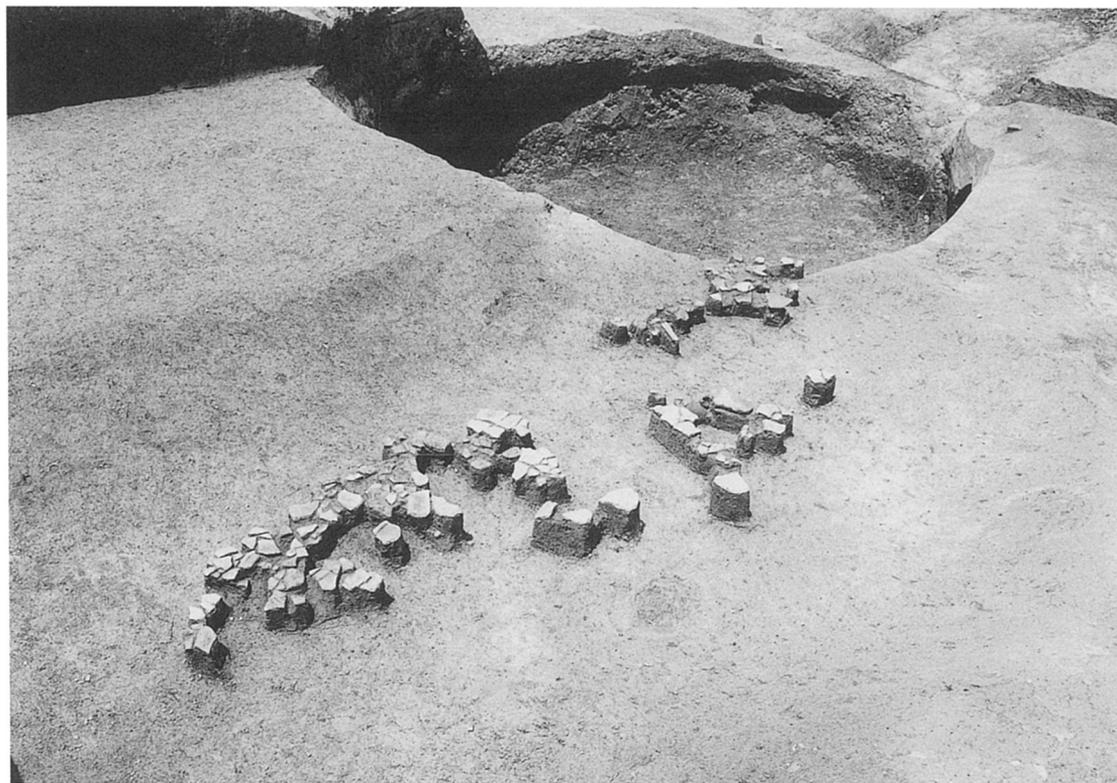
5号墳全景（北から）



5号墳東辺周溝断面



5号墳南辺周溝内遺物出土状況（東から）



5号墳東辺周溝内遺物出土状況（北東から）





20



26



21



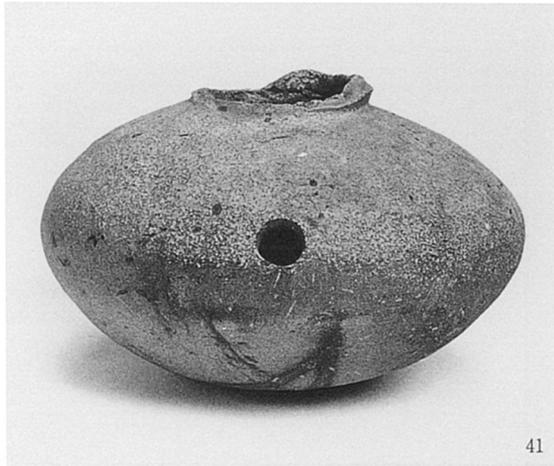
27

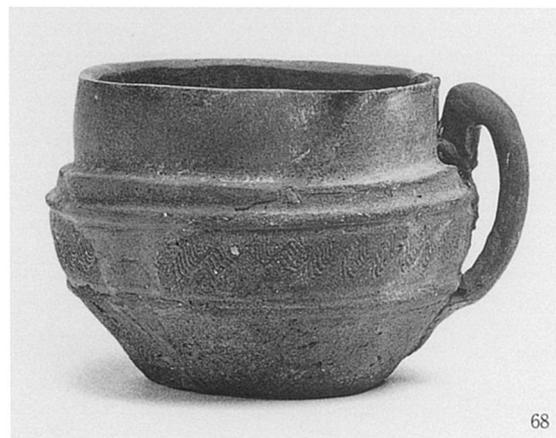


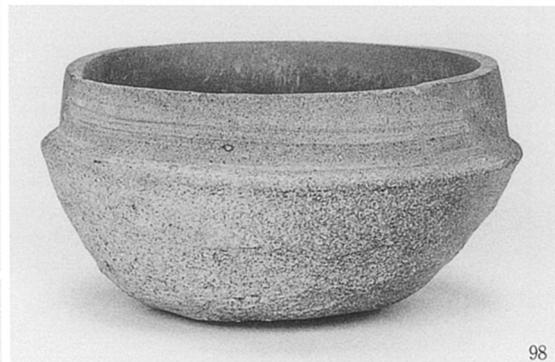
22

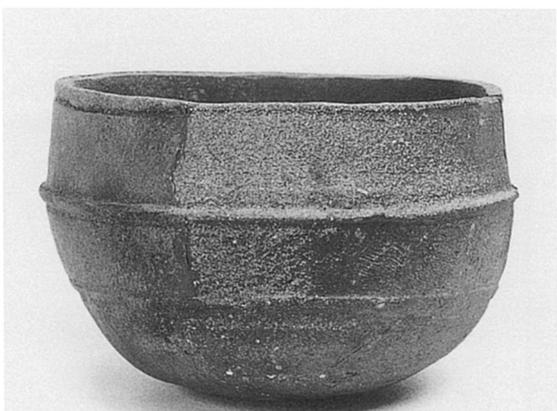


28













130



143



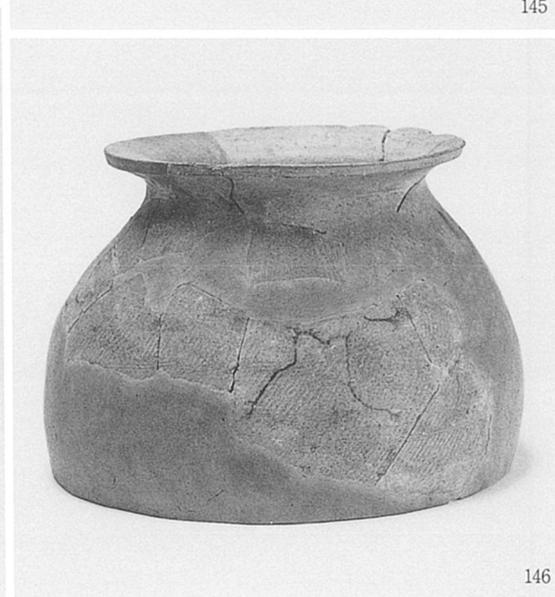
136



145



140



146

